

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第十六課 みずうみのえを かいたことがありますか：経験・予定の表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002795

基礎編第十六課

みずうみのえを
かいたことが ありますか

—— 経験・予定の表現 ——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を予定している。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。

この第十六課「みずうみのえを かいたことがありますか」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたった者は、次のとおりである。

本文執筆 日向 茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部
日本語教育教材開発室）

資料1.、資料2. 日向 茂男

昭和58年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成——場面を中心として	6
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	6
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての解説	6
3. この映画の学習内容の整理	32
3.1. 経験・予定の言い方	32
3.1.1. 経験の言い方	32
3.1.2. 習慣の言い方, 回想の言い方	36
3.1.3. 臨時的生起の言い方	37
3.1.4. 予定の言い方	38
3.2. 「コト」を含む類型的な表現	41
3.2.1. 「コト」の意味・用法	42
3.2.2. 述部形成に関与する「コト」	43
3.2.3. 「～コトダ」「～モノダ」「～ノダ」	44
3.2.4. 「モノガアル/ナイ」「モノニナル(スル)」	46
4. 練習問題	47
5. 参考文献	55
資料1. 使用語彙一覧	57
資料2. シナリオ全文	87

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「みずうみのえを かいたことがありますか」は、その第十六課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次のとおりである。

昭和54年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学専任助手
川瀬 生郎 東京外国語大学附属日本語学校教授
木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男 東京外国語大学教授
斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター助教授

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長
武田 祈 日本語教育センター日本語教育教材開発室長
日向 茂男 “ 日本語教育教材開発室研究員
清田 潤 “ “ 技官

この映画「みずうみのえを かいたことがありますか」は、日向茂男の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室の日向茂男が全体企画・編集を行い、

執筆にもあたったが、2.については日本語教育センター研究員石井久雄の草稿をもとに、3.については言語体系研究部長高橋太郎、石井久雄の助言をもとに執筆を進めた。また資料1., 資料2.は、日向茂男が担当した。全体の企画, また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「みずうみのえを かいたことがありますか」は、表現内容の観点からは、サブタイトルにあるとおり経験・予定の言い方を主な学習項目とした作品である。一方、学習内容を語法的にみると形式名詞「コト」を導入し、その用法に関する理解を深め、表現内容の拡充をめざすひとつの段階として位置づけられるものである。したがって、形式名詞「コト」を含む表現

げられているわけで、経験・予定に関する言い方全般が扱われているわけではない。

形式名詞「コト」については後で概説するが、「コト」には、いわば慣用句のように前接、下接する成分の種類により経験、予定、可能、必要など一定の表現意図に結びつくものがある。ここで取り上げた前接する成分は、動詞の現在形（「スル」）、過去形（「シタ」）であり、下接する成分は、格助詞を介しての「アル/ナイ」「スル」「ナル」である。当然のことながら、動詞の現在形・過去形の形態に関する学習、動詞「アル/ナイ」「スル」「ナル」の基本的用法に関する学習が前提とされる。その前提がない場合には、それなりの学習上の工夫と学習内容の拡充が要求されることになる。

この日本語教育映画基礎篇の系統的な学習を考えると、「アル」を扱った作品には「さいふはどこにありますか」と「きりんはどこにいますか」があり、「ナル」「スル」を扱った作品には「うつくしいさになりました」がある。「アル/ナイ」「ナル」「スル」の基本的な意味・用法の学習には、ぜひそれらの作品の利用を考えてほしい。

以下、この映画での中心的学習項目について語法の観点から整理し、簡単な説明を加えることにする。次の四つを学習項目としてあげることができる。

- (1) ～スルコトガ（モ）アル/ナイ（ある動作・作用が常にではないが起こること、またその可能性があることをいう言い方）
- (2) ～シタコトガアル/ナイ（過去の経験の有無をいう言い方）
- (3) ～スルコトニスル（予定、意志決定をいう言い方）
- (4) ～スルコトニナル（すでに、それが決まっているという既定の事柄をいう言い方）

(2)と(3)がこの映画の中心的な学習項目であり、(1)(4)は、(2)(3)の学習内容を少しく発展させることを考えてここに取り入れられている。

(2)の「～シタコトガアル」に比べると、(3)の「～スルコトニスル」は、

「～スル」や「～スルコトニシテイル」との対比で意味・用法を考察していかなければならず、なかなか難しい問題があるが、「毎日、絵ヲ三時間カク／カクコトニスル（シテイル／シタ）」のような例文を通してその基本的な意味・用法の理解をはかりたい。

(1)の「～スルコトガ（モ）アル」も、(2)の「～シタコトガアル」に比べると、その表現内容を一言できちっと言い切ることが難しいが、(2)との対比で、つまり「コト」に前接するのが動詞の現在形か過去形かで、その表現内容が変わることに注意を向け、その基本的意味・用法の理解をはかっていきたい。「～スルコト（モ）アル」は、国語辞書では「場合」「可能性」などと説明されているが、頻度の副詞を補って「タマニ／トキドキ……スルコトガ（モ）アル」とか、「ホトンド／メッタニ……スルコトガ（モ）ナイ」とかするかとその意味するところが理解しやすい。難しく言えば、「臨時的生起の表現」とでも言えようか。

(4)の「～スルコトニナル」は、(3)の「～スルコトニスル」との対比でこの映画の学習項目として取り上げられたが、これは「ナル」「スル」の発展的学習を考慮してのものである。(3)が自分の予定・意志決定を表明するのに対し、(4)はある状況の中でそう決まった、そう決まっている、という既定の事柄を表す。日本語の表現としては、ごく一般的であり、また重要なものであるが、この映画中には用例が一度しか出てこないのので、映画を離れての補助学習が必要である。ここでの「～スルコトニナル」の学習を重視しない場合は、映画中の用例に軽く触れるていどで済ましてよいと思う。

なお、「ナル」「スル」とも「コト」に前接する部分を動詞の過去形にすると「～シタコトニナル」「～シタコトニスル」という表現形式ができるが、これらは単に現在過去といった枠組で把握しきれない表現内容を持つことに注意しておきたい。

以上のほかに、臨時的生起の表現（「～スルコトガ（モ）アル／ナイ」）に関連して並列的列挙の表現とも言うべき、

(5) ～シタリ、～シタリスル

の「タリ」の意味・用法を学習項目とした。

また、経験・予定の表現についてまわる「時」に関する表現も当然、学習項目ということになる。

さらに、次のような項目もこの映画での学習項目として取り上げることができる。

(6) 「――て」の形で、動作・作用の継起を表す言い方の理解

(7) 動詞文による連体修飾の理解

(8) あいさつ、あるいはそれに準ずる慣用的表現の理解

(9) 日本文化を背景とした語の理解

(6)については、「きょうは あめが ふっています」で、また、(7)については、「なみのおとが きこえてきます」で扱っている。それぞれ、各映画解説書を参照してほしい。

(8)は、今までもこの日本語教育映画でたびたび取り上げられている。場面を設定して会話を展開するという映画の本来的な性格から、こうした表現が生まれてくるわけだが、意識的に省略せず、日本人の会話に注意が向くように配慮している。この映画では、「いただきます」「いってらっしゃい」などがあるが、積極的な学習項目とするか、単に日本人のあいさつていどの説明にとどめるかは、学習上の段階や学習目的と結びついた問題である。

(9)も映画の舞台設定と関連することだが、日本的な風物を映画の背景に取り入れたため生じたものである。基本的な学習項目だけに終始するよりは、そうしたものが映画の背景にあることで、さらに学習者の興味を増すものと考えられる。この映画では、「城」「神社」「民家」などの語が、映像を伴って提示される。単に通りすぎてもよいが、学習者の興味などに応じて取り上げれば、わずかな時間でもことば学習以上のものが生まれることになる。これは、映像教材の特長である。

なお、この映画のはじめめほどは、友だちにあてた平易な手紙文の形式になっている。学習者の日本語能力に応じてこれを取り上げれば、日本語の手

紙文の書き方も学習項目のひとつに挙げるができる。

手紙の形式は、電話のかけ方などとともに広い意味における表現形式のひとつである。こうしたことばの運用に関わる表現形式には、学習上の早い時期から接しておくことが望ましい。手紙の形式には、手紙文の書き方ばかりでなく、封筒の表裏面、葉書の表面の宛先、宛名の書き方なども当然含まれる。

2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって、場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それをさらに小場面に分ける時には、Ⅰ—1、Ⅰ—2、Ⅰ—3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で① ②……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、' の印をつけ、①'②'……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には、''、'''の順で'を重ねていく。
3. なおこの映画中に直接現れていない文や語句を例示する時には、〔1〕〔2〕……のように〔 〕付きの番号をつけ、その変形引用には、上記2.の場合同様'印をつける。文や語句を束にして例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもあるが、ここでは積極的にはその問題に触れない。なお①②……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

映画は、二人の女子学生の行動を中心に展開する。季節は夏である。夏休みになって、田舎に帰省した正子は、田舎での自分の毎日の生活の様子を書いた手紙を東京の淳子に送る。この手紙の内容が映画としては、前半の主な内容である。淳子も正子の田舎へ遊びに行く約束が出来ていたことが、手紙の最後で分かる。後半では、やがて田舎へやってきた淳子と迎えた正子の二

人の生活の様子が主に描かれる。

映画での正子、淳子の行動は絵をかくことに中心がある。そこで、この二人は美術大学に学ぶ女子学生であろうと推察できる。大学生の多くは、自分の田舎があれば、帰省して夏を過ごす。田舎がない場合には、海辺や山間の民宿などに出かけることも多い。単に休暇として過ごす学生もあるが、普段集中的にできないことをまとまった時間でやろうと考える学生もある。正子は絵をかく毎日である。淳子にも田舎の風物をかくことをすすめ、自分の田舎へと誘った。映画は、こうして絵をかくことを中心に、正子、淳子の夏休みのひとこまが描かれていく。

ついでながら、夏休みにはアルバイトに熱中する大学生も数多くいる。いずれにしろ、夏休みは学生にとって天国である。

この映画の田舎の舞台となったのは、千葉県大夷隅（おおいすみ）郡大多喜（おおたき）町である。大多喜には、国鉄を利用すれば、東京駅から外房線大原駅に出て、そこで木原線に乗り換えていくことになる。房総半島の中ほどにある山間の町である。

映画に描かれた町の様子をよく観察すると分かることだが、大多喜は城下町である。そのシンボルとなるのが大多喜城である。ただ映画中の大多喜城は、元々の大多喜城ではなく、その城跡に大多喜城を模して造られたものである。正式名は県立総南博物館で、昭和50年に開館した。

大多喜城は、現在の大多喜の町から少し離れた場所にあり、散歩に出るにはいい距離である。少し急な坂をのぼっていくと、大多喜城に着く。淳子と正子もこの道を散歩している。

また、淳子、正子が絵をかきに行く湖は、実際はダムの用水であり、湖ではない。大多喜の町から少し離れたところにある荒木田ダムで撮影が行われた。

以上、この映画での主なる登場人物、季節、背景について概観したが、映画の場面展開に即して各場面の内容を整理してみると、次のように流れを追うことができる。

- I 淳子の部屋で（正子から届いた手紙についての、淳子の母と淳子のやりとり）
- II 正子から淳子への手紙の紹介（手紙を読む淳子。正子の田舎での生活の様子）
- III 正子の家——茶の間で（淳子が今日やってくることについての、正子の母と正子のやりとり）
- IV 正子の家——台所で（ごちそうの準備をする正子の母。手伝おうとする正子）
- V 田舎の駅で（淳子を迎える正子）
- VI 正子の家——客間で（到着した淳子を接待する正子の母と正子）
- VII 城へ向かう道で（城へと散歩する淳子と正子）
- VIII 正子の家——正子の部屋で（絵をかくことを相談する淳子と正子）
- IX バス停留場で（湖へと向かう淳子と正子）
- X 湖のほとりで(1)（お昼ごはんを食べる正子と淳子）
- XI 湖のほとりで(2)（帰りたくをする正子と淳子）
- XII 湖のほとりで(3)（正子と淳子、帰りかけながら）

I と II は、東京の淳子の家でのことであるが、I は手紙というものによる映画展開のきっかけであり、II は手紙による正子の生活紹介であるから、I、II あわせて III 以降に展開する話の前提になっている。それを受けて、III ～ XII ではすでに述べたとおり田舎を舞台として話が展開している。

以下、上記の場面展開に即して言語表現上の問題点等について述べていくことにする。

I 淳子の部屋で（①～⑥）

淳子が机に向かって本を読んでいる。部屋の壁には美術関係のポスターが目につく。淳子が画学生であることは、映画の展開とともに明らかになっていく。室内はわりあい雑然としているが、大学生の部屋としては一般的なものであろう。そこに母親の声が聞こえる。

淳子の母「①淳子。」

(淳子、母の方をみる。)

淳子の母「(手紙を手渡ししながら)②はい。

③正子さんから手紙ですよ。」

淳子「④どうもありがとう。」

淳子の母「⑤これから、ちょっと、買物に行ってきます。」

淳子「⑥はい。」

①は、名前による淳子への呼びかけである。映画的には、主要登場人物のひとりに名前を与え、見る人に紹介したことになる。この時、母親が左手から現れ、淳子は母親の方に顔を向ける。視線が合えば、あるいは振り向く動作で注意を向けたことが分かれば、それも応答のひとつになる。ことばで答えるとすれば、相手の呼びかけを認知したという意味の「はい」になる。

②の「はい」は、応答の「はい」と違って物を差し出す時に使うもので、相手が目上であるか目下であるかに関係なく、広く一般的に使われる。この「はい」は、「ええ」や「うん」に置き換えることができない。

③の「正子」「手紙」も、キー・ワードになることばである。「正子」は、もう一方の主要登場人物を思わせ、「手紙」は、今後の映画展開を予想させる。

③では、語法的には、「から」が問題である。この「から」が文中のどの成分と結びついているかということになると、説明がなかなか難しい。文末「です」を「来ています」の代動詞と考え、「からです」とする説明、「～からの」の「の」が省略されたとする説明、「～から来た」の「来た」が省略されたとする説明、といったものが考えられるが、「～から」が「手紙」を修飾すると説明することもできる。

〔1〕 淳子さんへ手紙(贈り物)です。

〔2〕 正子さんのところへ旅行(出発)です。

〔3〕 正子さんのところまで旅行です。

〔4〕 正子さんのところで夏休み(勉強)です。

〔5〕 正子さんと旅行です。

などを参照されたい。「～から」「～へ」「～まで」に関係する名詞は、なんらかの意味で移動の観念を伴っている。「～で」は、関係する名詞に行為の観念が伴い、その行為の行われる場所を示す。というように用いられる名詞には制限があり、文末に「～だ」「～です」のような形をとることになる。この形の制限から「～だ」「～です」が代動詞であるという説明にもなるのである。

④「これから」は、時間関係の言い方。この時点から、つまり、今からの意味である。⑤「ちょっと」は、それほど大げさなことではないのだがといった意味を添え、表現の断定性をやわらげるためによく使われるものである。⑤「行ってきます」は、事実を述べてもいるが、あいさつの気分もある。あいさつの「行ってきます」については、⑩参照。

⑥の「はい」は、相手の発話を認知した時に使うことば。相手の発話に同調的に応じえる「ええ」と基本的に性格が異なる。②の「はい」と比べられたい。

Ⅱ 正子から淳子への手紙（⑦～⑫）

淳子が正子からの手紙を開いて読み始めたところで、画面は正子の日常生活に変わる。音声も正子のナレーションによる語りかけである。

手紙は、その時その時の用件や目的があって書くものである。依頼、照会、通知、報告、案内、お見舞い、お悔み、お礼、おわび、など、手紙の用件や目的はさまざまであるが、改まった内容のものほど、手紙の書き方には形式があり、決まり文句が多用される。

手紙の文章は一般に、前文、主文、末文、後づけという四つの部分から成り立っている。正子からの手紙は、友だちに近況を述べるだけの形式ばらないスタイルのものであるが、一応この順で構成されている。ただ、後づけが簡略化されているから、手紙の書き方の参考にするためには、その辺を補って説明した方がいいであろう。

正子の手紙の構成は、次のようであるが、それぞれの部分に一般的に書か

れるものを示しておく。

前文 (⑦～⑩) ……頭語 (「拝啓」など), 時候のあいさつ, 相手の安否のあいさつ, 自分側の安否のあいさつ

本文 (⑪～⑰) ……伝えたい内容 (用件)

末文 (⑱～⑳) ……用件の結び, 結びのことば, 結語 (「敬具」など)

後づけ (㉑) ……日付, 自分の氏名, 相手の氏名

個々の部分については, 正子の手紙に即して説明していく。

最近, 電話で用件を済ませることが多くなってきているが, 自分の気持や近況, また用件を正確に伝えるには, 手紙の方がいい場合も多い。手紙を書くのは, 日記とまた違って, 日本語学習のための良い手段である。

Ⅱ-1 手紙の前文 (⑦～⑩)

手紙が画面で広げられ, 正子のナレーションが入る。画面はすぐ変わり, 暗い中でゆかたを着てペンを走らせている正子になる。この姿は, 後でも繰り返され, 映画的に手紙の始まり, 終わりを示すものとなっている。

- ⑦ 淳子さん, お元気ですか。
- ⑧ 東京は, 毎日, 暑いでしょうね。
- ⑨ こちらは, たいへん涼しいです。
- ⑩ 田舎へ帰ってきて, もう, 一週間もたちました。

この手紙では, 「拝啓」などの頭語がなく, 若い女性どうしなどでよく使われる, くだけた形式の書き出しになっている。多少改まった一般的な形式で書くなら, 頭語で始め, 時候のあいさつをしてから,

[6] お元気のことと存じます。

[7] お元気のこととお喜び申し上げます。

などのように相手の安否についてのあいさつになる。これは, 特に相手が病気であることが確実でもない限り, 元気であるものと考え, それを表明する形式である。かりに相手が病気であっても, それで礼を失することにはならない。

ここでは、⑦のように相手に呼びかけることで、手紙を始めた。まず相手の名を言うことで親しみを出し、文末の「か」で相手に語りかける気分を出している。したがって、時候のあいさつの方が後になった。形式的な形で時候のあいさつを述べるなら、「拝啓」に続いて「盛夏の候」などとするか、あるいは、

〔8〕 連日厳しい暑さが続いております。

などとする。季節によって、それぞれの時候のあいさつがある。⑧は平易な時候のあいさつで、それに続く⑨は、⑧との対比で自分の側の様子を述べたもの。⑧「東京」と⑨「こちら」がコントラストになり、これは⑩で「田舎」と言い直される。また、⑧「暑い」と⑨「涼しい」がコントラストになっている。

⑨ ⑩は、手紙の形式に対応して言えば自分の側の安否のあいさつに相当する。⑨から⑩へと、自分の側の様子、自分の行動へと話が展開していくが、これは手紙の主たる内容である自分の近況報告への導入ともなっている。

⑩の「田舎」は、人口密度が高く、商工業の発達した都会（ここでは「東京」）に對することばであるが、また、現在はそこに住んでいないが自分の生まれ育ち、肉親などが住んでいる地方、郷里のことも言う。正子は、夏休みになって帰省したのである。

⑩ 「帰ってきて」の「――て」は、「～て以来」の意味である。「一て」は、基本的にはある動作、作用から次の動作・作用への推移を表しているが「一て」の後で時間的表現をとる場合、「～て以来」の意味になる。つまり、「帰ってきた」のは「私」であるが、「たつ」は「一週間」である。

ここでの時間関係のことばには、⑨「毎日」、⑩「一週間」、⑩「(時間が)たつ」がある。「毎日」の「毎」は、時間の単位を示す助数詞(秒、分、時、日、など)や時間的な幅を示す語(朝、夕、晩、夜、週、日曜日、夏、年、など)と結びついて、そのたびごとにの意味を表す。

次に⑩の「週間」は、「週」が七日をひとまとまりとして区切ったものであるのに対し、それを単位基準にして期間を表す。数詞を前接して数える。

「たつ」は、時間が過ぎていくこと。「一週間もたつ」の「も」は、「一週間」という時の長さ（あるいは時間経過の早さ）を強調している。

Ⅱ—2 正子の日常——朝の散歩 (⑪～⑫)

画面は一転して、正子の日常である。手紙の内容からいえば本文に当たり、形式的な手紙なら「さて」「ところで」などで始まるところである。この手紙は、そういう固苦しいものでなく、内容も正子の田舎の生活の紹介であるが、これは、淳子がこちらへ来ればどんな生活が待っているかの案内でもある。まず、述べられていらることは、朝の散歩である。

⑪ 私は、毎朝、早く起きて、家の近くにある神社のあたりを散歩します。

⑫ 時々、遠くの川まで行くこともあります。

⑪は、三文の合成されたものである。

⑪' 私は、毎朝、早く起きます。

⑪'' そして、神社のあたりを散歩します。

⑪''' 神社は、家の近くにあります。

⑪' と ⑪'' は、時間の経過に従って行った動作・作用として「——て」の形でつなぐことができる。先の⑩の「——て」も参照。⑪'''は連体修飾成分となって、⑪'' に組み込まれ、⑪となっている。こうした文を結合して重文を作る練習も一方の学習項目にすることができる。

⑪「毎朝」については、⑧の「毎日」を参照のこと。⑪「あたり」は、「そこ、およびその近辺」。ここでは神社と神社の近辺だが、画面では神社そのものになっているので注意。ここが寺ではなく神社であることは、鳥居が写し出されていることで知られる。神社は、日本人の祖先から伝わる神々などをまつってある所、またその建物。それに対して、寺は仏教のもので、仏像が安置され、僧などが修行や仏事を行う所。⑫に「お寺」がある。

⑫では、主要学習項目のひとつ「～スルコトガ(モ)アル」が提示される。

これに「時々」という頻度の副詞がついている。⑭で述べた行為は「毎朝」のものであるが、「遠くの川まで行く」という行為が生じる場合も「時々」ある、というわけである。「～スルコトガ(モ)アル」は、ある動作・作用が常ではないが起こること、起こり得ること(場合、可能性)を表す言い方である。⑮を、

⑮' 時々、遠くの川まで行きます。

とすれば、単に事実を述べた言い方になる。

[9] { いつも和食を食べます。
時々、洋食を食べることもあります。

Ⅱ—3 正子の日常——午前中の絵の勉強(⑬～⑮)

正子の朝食後の午前中の日課が述べられていく。絵をかくことが中心である。

⑬ 午前中は、絵の勉強をしています。

⑭ 八時七分のバスで、湖へ絵をかきに行きます。

⑮ 毎日、三時間は、絵をかくことにしました。

⑬「午前中」も時間関係の表現である。「中」は時間的な幅を示す語に接尾辞としてついてその限られた時間範囲内で、あることがずっと続くという意味を表す。「中」は、「じゅう」と発音されることもある。「中」には、また時間関係以外の幅広い用法がある。「午前」は、日常生活では夜が明けから正午ごろまでの時間。正午からは、「午後」である。⑯では、「お昼ごはんの後」の言い方をしている。

⑬で「——ている」が用いられている。先の⑪、そして⑭、⑯には「——ている」が用いられていないが、これらを「——ている」で表現することも、また⑯を「——ている」を用いず表現することもできる。ただ「——ている」を用いるか、用いないかでは表現上微妙な差があるようである。一般的にいえば、「——ている」は動作・作用の進行を積極的に表すが、単なる現在形にはそうした働きがない。ここでは、「絵の勉強をする」が力点の置

かれた話の中心であることから、つまり、毎日しているという行為を強調したいところから、また「午前中」いう持続時間を示すことばとの結びつきから、「——ている」という形が選ばれたと思われる。そうすると、⑪、⑭、⑯は、ここでは単なる叙述にとどまっていることになる。

この問題については、「いくつかの文法的類義表現について」（宮島達夫、1964、『ことばの研究 第2集』、国立国語研究所）に多少の説明がある。参考のために引用する。

「会話などのように、発言の瞬間が基準になるものについては、『～ている』を現在形でおきかえることはできない。（略）しかし、物語のばあいなどのように、発言の行為が特定の場面をはなれ、発言の瞬間ということが問題にならないものについては、現在形も『～ている』とそれほどちがわなくなる。」（p.78）

⑭の「八時七分のバス」は、自分が乗る停留所を八時七分に発車するバス。バスの発車時刻までわざわざ言っているのは、田舎でバスの本数が少ないことも関係しているが、自分の毎日の日課をていねいに淳子に知らせたい気持もあるからである。「七分」は「ナナブン」と発音している。「シチブン」は無声化がからんで発音しにくいようである。

⑮「湖」は、やがてこの映画の主要舞台のひとつになるところ。正子の家からそう遠いところではないと思われる。⑭の「かく」は、「絵をかく」「湖をかく」のように言える。「湖の絵をかく」も当然可能な言い方である。また「字をかく」「文章をかく」「手紙をかく」「小説をかく」なども「かく」で、「かく」の用法が広いことに注意。

⑯「三時間は」の「は」は、最低限度を示す。八時七分のバスに乗り、湖へ十分ほどで着くとして八時半ごろからは絵がかかる。十二時までがんばれば三時間半である。毎日、三時間かける絵の勉強も、画学生としては当然なのだろう。非常に多くて驚くに値するようなら、「三時間も」となるところである。

⑰では、もうひとつの主要学習項目である「～スルコトニスル」が提示さ

れている。自分の予定や意志決定を表す言い方だが、ここでは予定をたてた（決定した）のが過去のことだから過去形となっている。しかしこの意志決定は、現在も引き続き実行されているから、

⑮' 毎日、三時間は、絵をかくことにしています。

とも言える。「～スルコトニシテイル」は、自分がすでにそう予定（決定）して、そのつもりであることを表すが、それが継続実行中のものであればすでに習慣として行っていることを表す。⑮'にはそういうニュアンスがある。単なる叙述、また意志の表明であれば、

⑮'' 毎日、三時間は、絵をかきます。

でもいい。

Ⅱ—4 正子の日常——午後の楽しみ（⑯～⑰）

午前中、絵の勉強をしている正子は、午後も湖畔で過ごすようである。午後の暑い日差しの中をわざわざ帰ることもないし、バスの来る時間の問題もある。午後は、引き続き絵をかくこともあるが、自分の楽しみで過ごすこともある。

⑯ お昼ごはんの後には、絵をかいたり、本を読んだりします。

⑰ ラジオの音楽を聞くこともあります。

⑯「～(の)後」も、ここでは時間関係の言い方。「その後」「授業の後」「学校が終わった後」などの言い方で用いられる。⑩⑪の「——て」の形や、「——てから」などと比べられたい。

⑯の「～たり、～たり」による列挙の言い方も学習項目のひとつである。この形式によって列挙される行為は、同類と言い得る観点によって支えられているもので、ここでは、正子が午後、行う行為という観点が基にある。したがって、

⑯' お昼ごはんの後には、絵をかいたり、湖が赤く染まったりします。

というような表現はできない。「～たり、～たり」の形による列挙は、そこに述べられた行為で同類のすべてが尽くされてしまうことも、他にさらに同

類の行為があることもある。

⑩ 夏休みは、正子が淳子を訪れたり、淳子が正子を訪れたりして、過ごします。

というのであれば、同類は尽きている。⑩は、さらに同類がある例である。その同類は、⑪で具体的に述べられている。したがって、⑩⑪を一体のものとして、一貫した形を与えながら、

⑩' お昼ごはんの後は、絵をかいたり、本を読んだり、ラジオの音楽を聞いたりします。

のように言うこともできるし、また、

⑩''' お昼ごはんの後は、絵をかくことも（あります。）本を読むことも（あります。）ラジオの音楽を聞くこともあります。

のように言うこともできる。さらに、

⑩'''' お昼ごはんの後は、時には絵をかき、時には本を読み、時にはラジオの音楽を聞きます。

のように言うこともできる。

⑪の「～スルコトモアル」も、したがって、ある動作・作用の起こる場合があること、可能性のあることを示していることがわかる。⑫を参照のこと。

Ⅱ—5 手紙の末文（⑬～⑲）

再び、手紙を書いている正子の姿である。淳子がこちらへ来ればどんな生活が待っているかの案内も兼ねての、正子の日常生活の報告が手紙の主内容であった。ここで手紙をしめくくることになる。末文があって、後づけがくるわけだが、この手紙には、後づけがほとんど省略されているので、いっしょに扱う。

⑬ 淳子さんがこちらへ来る日は、来月の九日でしたね。

⑭ 駅まで迎えに行くことにします。

⑮ では、また。

㉑ 正子

手紙の末文は用件の結びを述べ、相手側に言及して相手の健康を祈った
り、自分の不明をわび、結語を書く。この手紙では、⑬で相手の自分に関わ
る行動についてわざわざ言及し、⑭でそれに対応する自分の行動について述
べている。⑯は、友人あての簡略な結語である。頭語が「拝啓」などの語で
あれば、「敬具」などでしめくくる。

この手紙の後づけには、日付や宛名^{あてな}が省略されている。また署名も名だけ
であり、姓が省かれている。ここでは映画的に煩瑣を避けただけのことで、
実際には後づけの形式を踏むことが望ましい場合が多いし、親しい友人あて
でもそれで変ではないだろう。書くとするれば、日付は本文より少し下げて書
き、日付の次の行に署名する。宛名は署名の次の行の上の方に「様」などの
敬称をつけて相手の姓名を書く。

⑬には動詞文による連体修飾成分が組み込まれているが、⑭の文に比べると
幾らか難しい問題がある。「淳子さんがこちらへ来ます」を取り除いて、
単純に「日は、来月の九日でしたね」とできないからである。「日」には
「その日」とか、何らかの限定が必要である。こうした問題については、
「なみのおとがきこえてきます」の解説書を参照のこと。

また、⑬の「来月の九日でしたね」の「た」は、予定の確認である。相手
がそのことを知っているとしてもわざわざ注意を喚起したわけである。「た」
は、内容が予定でなくても当然確認に使うことができる。

[11] 今日は、九日でしたね。

[12] あなたは、石井さんでしたね。

[13] 日本の首都は、東京だったね。

など、など。

⑬の「来月」は、夏休みという文脈からいって八月であろう。したがっ
て、この手紙は七月の末に淳子へ出していることになる。

⑭の「駅」は、正子の今いるところにある田舎の駅。具体的には大多喜の
駅である。⑯には、改まらない場合の結語として「さようなら」もある。⑳

は自分の署名。

Ⅲ 正子の家——茶の間で (22~23)

カレンダーの日めくりが八月九日を示している。ここは正子の家のようである。手紙中の正子ともうひとり別の女性が茶の間のちゃぶ台に向かって座っている。もうひとりの女性が正子の母であることは、映画の展開から分かる。この茶の間には、仏壇が見えたりし、その他細々としたものが雑然とあるが、割合い広々とした昔ながらの茶の間の感じである。

Ⅲ-1 淳子が今日やって来ることをめぐって (22~23)

正子の母「22今日は、淳子さんが来る日ですね。」

正子「23ええ、十二時五十二分の列車で着くことになっています。」

正子の母「24何かごちそうを作ることにしましょう。」

25何にしましょうか。」

正子「26そうですね……。」

27うーん、何がいいかしら。」

28お母さんにまかせますわ。」

22の「今日は、～ですね。」は、淳子が来ることを確認しての表現である。したがって、「た」を用いて18のように、

22'今日は、淳子さんが来る日でしたね。」

と言える。また、「淳子さんが来る」と「……日です」の関係は、18と同じである。表現的には、淳子と淳子の母は、正子の到着のことを今日までにもたびたび話し合ったりしていると考えられる。それが今日であって、再び話に出た。映像として八月九日の提示はあったし、また、これは18の「来月の九日」に対応しているものである。

23の「～スルコトニナッテイル」は、ある状況のもとですでにそれがそう決まっていて、そう実現する見込みである、という表現である。「～スルコトニナル」の方がそう決まっているという既定の事柄を表すだけなのに比べ

ると、「——ている」の分だけ表現価値が違う。

[14] 淳子は、八月九日、正子の田舎へ行くことになりました。

[14]' 淳子は、八月九日、正子の田舎へ行くことになっています。

「～スルコトニスル」と「～スルコトニナル」を比べると、前者の方が自分の予定、意志決定を表明するのに対し、後者の方が状況全体の中で自分の位置がそう決まったとする表現である。これは「スル」と「ナル」の表現の根本の問題につながっているが、[14]' や⑳のような言い方は、日本語ではごく一般的な言い方であることに注意を向けたい。

㉒で「十二時五十二分の列車」とわざわざ時間を言うのは、バスの発車時刻の場合と同じで大多喜の駅に着く列車の数は少なく、したがって決まった時間が問題になるからであろう。㉓も、㉒と同じくこの茶の間では何度も言われたせりふと思われる。

淳子の着く日がいよいよ今日となって、正子の母は、㉔ ㉕ のせりふを言う。この「何かごちそうを作る」は、㉖では「てんぶらを作る」という具体的な表現に置きかえられる。㉔では「～スルコトニスル」という予定の言い方が出ている。また㉕では、相談の形で「～ニスル」という決定の言い方が出ている。

㉖は、考え込むときの言い方。ここで「そう」は特に何かを指示しているわけではない。㉗の「うーん」も、㉖に続く表現。㉗は、㉕に対してすぐに答えが出ない表現で、これは㉘に続き、相手に一任することになる。「～にまかせる」は相手の思う通りにしてよい、頼んですっかりしてもらおう、ということになる。

Ⅲ—2 湖へ行く時間になって (㉙～㉛)

㉙のせりふを言って、正子は時計の方を見る。毎日の日課では、八時七分のバスに乗って絵をかきに行く。すでに八時である。正子は絵をかきに出かけようとする。

正子「㉙あっ、もうバスの時間だわ。

⑩「じゃあ、行って来ます。」

正子の母「⑪いってらっしゃい。」

⑫「気をつけて。」

正子「⑬ええ。」

⑭「あっ」は、今までの話から一転して自分がこれからすることに気付いた一瞬、発した感動語。⑮の「バスの時間」は、バスに乗らなければならない時間（が近づいている）という意味。⑯は、⑰ ⑱' と同じように確認の気持で言えば、

⑲' あっ、もうバスの時間だったわ。

となる。

⑳の「じゃあ」は、バスの時間となったので今までの話を一応打ち切りしようとして言ったことば。続く㉑と㉒のやりとりは、出がけのあいさつとして一般的である。㉑は出かける側の、㉒は送る側のあいさつである。㉓のことばは余分でもあるが、娘に対する母親の母親らしい気使いがことばになったもので、それにまた、正子は㉔で答えている。

この後、画面では湖に着いた正子が絵をかくシーンが入る。この湖の絵は、夏休みの日課として何が何でも仕上げたい気持が正子にはあるのであろう。しかし、今日は午後まで湖畔にいることなく、予定を変更して家に帰ってくる。昼食の後、今日は、駅まで淳子を迎えに行くことになっているからである。

Ⅳ 正子の家——台所で (㉕～㉗)

日本の家は、主たる部屋である居間や応接間を日当たりのよい南向きにするのが一般的である。台所や風呂、便所は北側に追いやられる。この画面の台所も昼間であるのにやや暗い感じがするのは、やはり北側に置かれているからであろう。

正子の母が料理をしているところへ、湖から戻ってきた正子が入ってくる

る。

正子「㉔ただいま。」

正子の母「㉕お帰りなさい。

㉖今日は、てんぷらを作ることにしましたよ。」

正子「㉗私も、手伝います。」

㉘㉙のやりとりは、帰宅したときのあいさつとして定型である。帰宅したものが㉘を、迎えるものが㉙を言うが、㉙を言う側が㉘を言う側より年上であるなら、末尾の「なさい」を省くこともある。なお、㉚㉛を参照のこと。

㉜も「～スルコトニスル」の表現で、すでに述べたとおり、㉘の表現の延長上にある。「てんぷら」は、多分今夜のごちそうであろう。ただここでは、まだ野菜を切るような準備の段階で、実際にてんぷらをあげたり、やがててんぷらを食べるところまで映画は展開していない。映画の時間的制約は当然あるものの、やはり残念である。

㉝「私も」の「も」は、正子のほかに母を手伝う人がいることを意味しているのではない。この「も」は、むしろ料理をすることに関係していて、料理をすることの結果が「手伝う」である。このような一種飛躍とも思える「も」の使い方は、まれではない。

[15] 私もお伴します。

など。

V 駅で (㉞～㉟)

画面は一転して駅である。都会の駅とは違って、土を盛り上げた形だけのホームになっている。着いた列車も、編成車輛数が少ない。この駅の描写も、時間的制約のため十分でないのが惜しい。ホーム、構内のもう少ししていねいな描写に加え、駅舎を正面から見た映像もほしかったし、また列車について言えば夏の山間を走る列車のような映像がほしいところであった。

列車から幾人もの人が降りてくる。改札口のそばに正子の姿があり、これは言うまでもなく淳子の迎えである。

止子「³⁸あっ。」

正子「³⁹こんにちは。」

淳子「⁴⁰こんにちは。」

正子「⁴¹あっ、それ。」

淳子「⁴²ありがとう。」

³⁸「あっ」は、²⁹と同じく気付いた時の感動語。正子は、列車から降りて歩いてくる人の中に淳子の姿を見つけたのである。³⁹⁴⁰は、日中のあいさつとして一般的であるが、毎日顔を合わす時間の長い人の間では使われないと
いっていいだろう。この場合は、しばらく会っていなかった場合のあいさつ
として使われている。「お早よう(ございます)」「今晩は」とは性格が違う
ことに注意。⁴¹の「あっ」も²⁹や³⁰の「あっ」と同様のもので、ここでは淳
子の重そうな持ち物に気付いて、「それ(その荷物)、持ってあげましょう」
と言いかけたのである。淳子は、⁴⁰の「ありがとう」で気軽に荷物を預け、
急いで改札口を通り抜けてくる。この荷物の一部が絵をかく道具であること
は、察しのつくところである。

Ⅵ 正子の家——客間で (⁴³～⁶⁵)

駅から家までの正子と淳子のやりとりは、省略されている。また家に着い
てすぐの正子の母と淳子とのあいさつも省略されている。画面は、淳子を迎
えた客間である。この客間には、床の間があって、典型的な日本間である。
正子の母はこの場面の後半でうちわを使い、淳子に涼を与えようとしてい
る。

Ⅵ-1 すいかを食べる (⁴³～⁶⁰)

正子の母「⁴³暑かったでしょう。」

⁴⁴さあ、どうぞ。」

淳子「⁴⁵いただきます。」

淳子「⁴⁶まあ、おいしい。」

正子「④⑦おいしいでしょう。」

淳子「④⑧ええ。」

④⑨こんなおいしいすいかは、食べたことはありません。」

正子の母「⑥⑩そうですか。」

④⑨の「暑かったでしょう」も言わば一種のあいさつである。「暑かった」は、「外は」、あるいは「ここに着くまでは」で、それを「でしょう」で推し量るように言う。真冬に訪れた人に玄関先で、まず、

[16] 寒かったでしょう。

というのと同類である。ともかく、ここで、あるいは家の中でくつろいで下さい、というニュアンスを持つあいさつなのである。

[17] 大変だったでしょう。

[18] 痛かったでしょう。

など、同様の表現は少なくない。

④④「さあ、どうぞ」は、以上のような気持のよい方向へいざなうことばである。のどの渇きをとり、涼を取るようすいかを勧める。④⑤「いただきます」は、食事を始めるときのことば。④④の勧めに対応している。すいかを食べ始めての、淳子、正子のことばは大変率直である。④⑥は、口にしたすいかのおいしさの素直な気持の表明であり、④⑦は、もてなす側にある正子の素直な同調である。同調というより、おいしいすいかであるはずだから気に入ってもらえたでしょう、という確信の表明である。正子にしてみれば、このすいかは正子の田舎の特産物か何かであり、淳子のためにわざわざ出したんだ、という気持があるのであろう。淳子は、それに④⑧で「ええ」と応じ、続いて④⑨で、すいかのおいしさについて自分の素直な感想を述べる。④⑦ ④⑧ あたりのやりとりは、少々年配の婦人どうしならば、

④⑦' いいえ、お口汚しで申し訳ございません。

④⑧' とんでもありません。

というようなやりとりになるであろう。正子の母の⑥⑩「そうですか」は、疑問の形でやり過ごしているが、④⑦' に近いものであろう。

④⑨には、主要学習項目のひとつであり、過去の経験の有無を述べる「～シタコトガアル／ナイ」が出ている。次のシーンでそれを主にした学習が展開される。

VI-2 淳子の回想（⑤①～⑥⑩）

正子の母は、ここで話題を変えた。淳子に以前、大多喜に来たことがあるかどうか、尋ねたのである。淳子は大多喜城に来たことがあり、淳子の回想はセピア色の静止画で写し出される。

正子の母「⑤①淳子さんは、前に、この町へ来たことがありますか。」

淳子「⑤②ええ。」

⑤③一度、来たことがあります。」

正子の母「⑤④いつですか。」

淳子「⑤⑤四年ほど前、お城を見物に来ました。」

正子の母「⑤⑥ああ、そうですか。」

⑤⑦お城へ行ったことがあるんですか。」

淳子「⑤⑧ええ。」

（時計が鳴って）

正子の母「⑤⑨おや、三時ですね。」

⑤⑩じゃあ、お楽に。」

⑤①は、淳子の過去の経験をきいているから当然「～シタコトガアル」の形式が質問形で使われている。その話の発展の中から、⑤③⑤⑦に同じ形式が現れる。この正子の母と淳子のやりとりで、「～シタコトガアル」の他に大事なものは、時間に関係ある表現と「行く」「来る」である。時間関係では、⑤①「前に」、⑤③「一度」、⑤④「いつ」、⑤⑤「四年ほど前」がある。⑤⑤は「四年ほど前に」でもよい。「に」は時間幅の中の一点を示す。「前」については、⑤⑩の「後」との比較で学習をはかりたい。「度」は、回数を数える助数詞。⑤①、⑤③、⑤⑤に「来た」があり、⑤⑦に「行った」がある。この⑤⑦の「行った」は、特に⑤⑤の「来た」と比べると、話者における「この町」及び「お城」

の心理的位置を明瞭に示すことになる。⑤⑥の話者、淳子は、東京から見て「この町」を一括してとらえ、したがって「この町」の中にある「お城」も「来る」ところとなるが、⑤⑦の話者、正子に母にとって、⑤⑧においては東京から見ての「この町」であったものの、淳子の⑤⑨の発言以後は、「この町」の中での関係、つまり自分の住む家と他の場所の関係になる。したがって「お城」へ「行く」になるのである。⑤⑥⑦の「～か」の形式は、納得・了承を表している。

時計が三時をつげる。正子の母は、それをきっかけにしてこの座を失礼しようとする。正子の友人を迎えての夕食のしたくもあるし、また一応のあいさつが済んだ後は若い二人だけにしてあげよう、という気持もある。⑤⑨はひとり言的であるが、⑥⑩の表現の導入になっている。⑥⑩は、自分の都合で客をそこに残したまま失礼する時のあいさつ。「ごゆっくり」などとも言う。

VI—3 散歩の相談 (⑥⑪～⑥⑮)

正子の母が立っていった後の正子と淳子の会話である。若い二人は、早速行動を開始する。

正子「⑥⑪疲れていませんか。」

淳子「⑥⑫いいえ。」

正子「⑥⑬じゃあ、散歩に行きませんか。」

淳子「⑥⑭そうだ、お城まで散歩することにしましょうよ。」

正子「⑥⑮ええ。」

淳子は、東京から大多喜の町へ来るため今日の午前のほとんどを費やしていると思われる。疲れるほどの旅行ではないが、正子は、一応淳子が疲れていないかどうかをきいた上で、散歩にでも出ようと思う。一休みした後の淳子は元気で、むしろ自分から前に行ったことのあるお城へ行こうと提案する。それが「～スルコトニスル」という計画を立てて言う表現と「～マシヨウ(ヨ)」という誘いかけの表現の組み合わせで言われている。⑥⑮は、

⑥⑮' そうだ、お城まで散歩しましょうよ。

と言っても意味にほとんど変わりがない。ただ「～スルコトニスル」がない分だけ、ストレートな言い方になる。多分、淳子はお客として来たばかりの自分が一方的に散歩の行き先を決めてしまうことの遠慮がどこかにあって（淳子がいろいろ考えていてくれるかもしれない）、⑥4'よりも⑥4の言い方をしたのであろう。

VII 城へ向かう道で（⑥⑥～⑦⑦）

大多喜城へ向かう道を、正子と淳子の二人が歩いている。画面は、それを二人の斜め前から追い続け、やがて二人が城の前へ来たところで、二人の後ろから城をとらえる。

淳子「⑥⑥毎日、散歩をしたり、絵をかいたりしているんですか。」

正子「⑥⑦ええ、とても楽しいわ。」

淳子「⑥⑧このお城の絵をかいたことがありますか。」

正子「⑥⑨ええ。」

⑦⑦この間、スケッチをしました。」

正子からの手紙で読んだ生活を、今、淳子も迎えつつある。そんな思いの中で、淳子は⑥⑥を口にする。「～タリ、～タリスル」については、①⑥の説明を参照のこと。⑥⑥の淳子の問いに、正子は⑥⑦で自分の気持を素直に述べる。正子には充実した楽しい夏休みを過ごしている実感がある。

城が見えるところまで二人は歩いてくる。たちまち具体的な絵の勉強の話になる。⑥⑧は、すでに述べたとおり過去の経験の有無をきく言い方。⑦⑦の「スケッチ」は、写生、写生画である。自然や事物を対象にしてその場での印象から簡単に絵にする。「スケッチ」はまた、下絵や心覚えとして簡略にかいたものをも言う。「スケッチ(を)する」が動詞(句)である。「お城のスケッチをする」、または「お城をスケッチする」のように用いる。⑦②の「お寺のスケッチをする」、「川をスケッチする」を参照のこと。

⑦⑦「この間」は、今日より少し前の日を指すが、ここでは当然夏休みになってからの範囲内である。これも時間関係の言い方のひとつである。

VIII 正子の家——止子の部屋で (71~83)

同じ話題は続いているが、映画的な技法で舞台は変わっている。城への散歩から帰り、たぶん風呂にも入り、ごちそうのてんぷらを食べ、正子の母（そして父）も加わっての一時のおしゃべりの後、二人は正子の部屋へ引き上げてきている。正子の部屋には、スケッチ集があり、かきかけの油絵もある。正子のかいた絵の話がひととおり済んだ後は、いよいよ二人があしたから絵をかきに行く相談である。

VIII-1 正子のかいた絵 (71~74)

二人は正子のスケッチ集を見ている。最初は城のスケッチであるが、これは前の場面から新しい場面へつなぐ映画的技法である。

淳子「①ほかに、どんな絵をかきました？」

正子「②近くのお寺のスケッチをしたり、川をスケッチしたり、湖をかいたりしています。」

淳子「③これですね。」

正子「④ええ。」

淳子の①の問いは、⑦の正子の返答以上のことが知りたくて出たものである。「ほかに」は話題になった城のスケッチを除いて、それ以外に、の意。⑦で正子は、二つのスケッチ、そして書きかけの油絵について言及する。「～タリ、～タリスル」については、⑩を参照のこと。

②「スケッチ(を)する」については、⑦のところで述べた。また「お寺」については、⑪の「神社」の説明で簡単に触れた。

かきかけの湖の絵は、イーゼル（絵をかくための台）に立てかけてある。それを見てのやりとりが⑦、④である。

VIII-2 湖へ行く相談 (75~83)

湖の絵がきっかけになって、湖へ絵をかきに行く話になる。こうして、あしたからの二人の行動プランが出来上がる。

正子「⑦⑤淳子さんは、この湖へ行つたことがありますか。」

淳子「⑦⑥いいえ、ありません。」

正子「⑦⑦午前中と夕方がとてもきれいですよ。——

⑦⑧湖の絵をかいたことがありますか。」

淳子「⑦⑨いいえ。——

⑦⑩私も、湖の絵をかくことにします。

正子「⑧①じゃあ、あしたから、毎朝、八時七分のバスで行くことにしまし
う。」

淳子「⑧②ええ。

⑧③そして、夕方までいることにしましょうよ。」

⑦⑤ ⑦⑥ に過去の経験の有無をきく形が出ている。否定形で答える場合、⑦⑥ のようにも⑦⑥ のようにも答えられる。⑧⑩ ⑧① ⑧③ に予定、意志決定を表す「～スルコトニスル」が出ている。出現回数が多いのと⑧④で述べたように「～スルコトニスル」を使わずストレートにも言えるところなので、聞きようによつては、表現がくどい感じがする。

⑦⑦は、「この湖は」について述べている。同じような言い方に、

[19] 桜は、今がきれいです。

などがある。⑧①の「八時七分のバス」は、すでに述べたとおり、毎朝正子が乗っているバスである。ここでの時間関係のことばは、⑦⑦「午前中」、⑦⑦ ⑧③「夕方」、⑧①「あしたから」、⑧①「毎朝」、⑧①「八時七分」。

Ⅸ バスの停留所で (⑧④～⑧⑤)

次の日の朝である。絵をかきに行くしたくをした正子と淳子が、八時七分のバスをバス停留所で待っている。

淳子「⑧④なかなか、バスが来ませんね。

⑧⑤もう、八時二十分ですよ。」

正子「⑧⑥ええ、時々、遅れることがあるんです。」

バスは遅れているらしい。⑧④の「なかなか」は、「～ない」を伴って、決

まったくおり（めるいは、考えたとおり）容易にめることか表現しない様子を言う。⑥は、「～スルコトガ（モ）アル」を用いての表現。⑫と同じように「時々」が頻度を表している。やがて、バスはやって来る。

この後、画面は変わり午前の湖畔で絵かくことに熱中する正子、淳子の姿が描かれる。

X 湖畔で(1) (⑧～⑩)

お昼になって、二人は食事にする。二人が食べているのは、おにぎりである。午前中ずつと絵をかいて、さて午後はどう過ごそうかという相談になる。

正子「⑧午後は、どうしましょうか。」

淳子「⑨そうですね……。」

⑩私は、民家のスケッチをすることにします。」

正子「⑪じゃあ、私は油絵の続きをかきます。」

正子は、⑧でまずお客として迎えた淳子の意向をきく。今まで二人が共に行動する際の予定の立て方、決定の仕方をみると、客である淳子の気持、意向が第一に尊重されている。城へ散歩に行く際は、疲れていないかどうかを尋ねた上で散歩の提案をしている。湖へ絵をかきにくる件も、正子はその気になってからバスの時間など段取りについて追加説明している。

⑫は、⑬に同じ。⑭の問いかけに淳子は、一瞬考えこむ。いろいろな行動の可能性があるのである。

淳子は、午後はスケッチをことにした。⑮は、「～スルコトニスル」を用いた意志決定の表現であるが、先にも述べたように「～スル」だけでも十分なところであろう。⑯での「民家」は、映像で提示されるとおりその地域の住民の住む日本の伝統的な家で、もはや都会には見られないものである。ふつう、民家と言えば、公共の建物ではなく一般の人が住むための家のことである。民家をかきたいという淳子の気持が決まれば、正子は共に行動することになる。それが⑰の表現である。

二人は、また絵をかき、やがてひぐらしぜみの鳴き声が聞こえ、夕方がやってくる。

XI 湖畔で(2) (⑨①～⑨④)

そろそろ帰る時間である。正子は淳子のところへやってきて、声をかける。

正子「⑨①もう、終わりにしませんか。」

淳子「⑨②ええ。」

正子「⑨③夕暮れには、湖が赤く見えることがあるんですよ。」

淳子「⑨④きれいでしょね。」

⑨①も相手の意向をきいているが、「～ニスル」は決定の言い方。⑨⑤にも同じ言い方があった。⑨③は、「～スルコトガ(モ)アル」を用いている。⑨③「夕暮れ」は、日が沈み、あたり一面薄暗くなりかけるころ。この夕暮れの残照を浴びて、「湖が赤く見える」ようになるわけである。正子は、これを淳子に見せたいと思う。⑨⑦で、夕方の湖は午前中の湖と同じようにきれいだといっている。湖面は、まだ染まっていない。ともかくも帰りたくをしななければならない。

XII 湖畔で(3) (⑨⑤～⑨⑩)

二人は、バス停留所の方へ向かって歩き始める。淳子は、ふと振り返って湖を見る。湖は赤く染まっていた。

淳子「⑨⑤まあ、きれい。」

正子「⑨⑥あー、ほんと。」

⑨⑦きれいですね。」

正子「⑨⑧さあ、行きましょう。」

⑨⑨バスに遅れます。」

淳子「⑨⑩ええ。」

湖は赤く映えている。それを見つめる二人。二人にとって充実した楽しい一日であった。が、いつまでもそのまま立ちつくしているわけにはいかな

い。バスの時間がある。正子は、ここでも細かい心配りをして、㉞を言って淳子を促す。㉞「～に遅れる」は、乗り場に行くのが遅くなって、乗れないこと。㉞の「遅れる」は「～が遅くれる」である。

二人は再び歩き始める。かくして、二人の湖畔での一日めは終わった。

3. この映画の学習内容の整理

この映画では、すでに述べたように表現意図の点から経験や予定を表す言い方を、語法的な点から「コト」を用いた幾つかの類型的表現を主要な学習内容として取り上げている。ただ、学習上の制約も考慮して経験・予定に関する言い方全般には及んでいないし、また「コト」を含む類型的表現も経験・予定の言い方とその周辺の言い方に限っている。

ここでは、まず表現内容としての経験・予定の言い方やその周辺の問題を概観し、次に「コト」が表現内容からみれば述部形成に関与している、慣用的、類型的な言い方を取り上げることにする。「コト」との関連で「モノ」の問題にも多少ふれるが、深入りはしない。

3.1. 経験・予定の言い方

表現意図の観点から考えていくと、「経験」の言い方は、ある人間がすでに実行した「過去」の行為をどう表現するかと、「予定」の言い方は、ある人間の観念の中で「これから実行しようとしている（したいと願う）」行為についてどう表現するかと関係している。言いかえれば、経験の表現は、過去、回想、想起などと関連のある表現であり、予定の表現は、未来の行為に向けての現在の立場、つまり意志、希望などと関連のある表現である。

3.1.1. 経験の言い方

「経験」と「過去」が表現内容の点でどう違うのか説明するのは、なかなか難しいが、幾つかの違いは指摘できる。「過去」は、過去の動作・作用、あるいは完了した動作・作用を叙述し、「現在」や「未来」と対立する時制

のひとつとして考えることもできるが、「経験」は、過去の動作・作用であっても、その出来事の有無に力点をおいてとらえ表現するもので、客観的叙述をする「過去」とは違う主観的側面の強い表現である。つまり、表現者が「経験」と考えるに足るとする実質的内容を含む必要があり、それが「～タコトガアル」の形式によって表現される。したがって、逆に「過去」でも「経験」でも言いうる場合が当然あり、そこには表現の選択の幅があることになる。

[20] 私は、ラーメンを $\left\{ \begin{array}{l} a \text{ 食べた。} \\ b \text{ }^{(?)}\text{ 食べたことがある。} \end{array} \right.$

[21] 私は、近所の酒屋さんに $\left\{ \begin{array}{l} a \text{ 会った。} \\ b \text{ }^{(?)}\text{ 会ったことがある。} \end{array} \right.$

先に実質的内容といったのは、[20] では「ラーメンを食べる」であり、[21] では「近所の酒屋さんに会う」である。[20] では、「私」を普通の日本人一般と考えれば、「ラーメンを食べること」は日常生活で極く普通にあることで、特に「経験」と呼べるような実質的内容を欠いている。こうした場合 [20. b] は、表現として成立しにくい。外国人観光者の体験談であるとするれば、「ラーメンを食べる」は「経験」に値する実質的内容となりえるので、表現として成立することになる。[21] でも「近所の酒屋さんに会う」ことは、失踪した近所の酒屋さんにたまたま出会ったことを述べるような特殊な文脈を除いて、「経験」としての実質的内容を欠くので、[21. b] の表現は成立しにくい。

ただ、実質的内容はさらに詳しく規定していくことができるから、

[20]' 私は東京で一番おいしいと評判の△△軒のラーメンを食べたことがある。

[21]' 私は新宿の裏通りの怪しげなビルの入口で近所の酒屋さんに会ったことがある。

のように [20], [21] にどのようなラーメンか、どのような場所か、と説明を加え、表現者が「経験」と考えるに足る実質的内容を備えれば、経験の

表現たり得る。

[20. b], [21. b] と違って [20. a], [21. a] は、単に過去の出来事を叙述した表現である。

次に「経験」の主体の問題を考えてみると、ここまではそれらが当然、擬人法の場合も含め人間であると前提して考えてきた。一般的には、この点も「経験」は、「過去」とは違うとして指摘できるところであろう。ただ次のような例からも分かるとおり、主体が人間でない場合があり、これらの場合は、単に「経験」とは呼べないようである。

[22] 大型台風がこの町を $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 襲った。} \\ \text{b} \text{ 襲ったことがある。} \end{array} \right.$

[23] この車は北海道から九州まで $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 走った。} \\ \text{b} \text{ 走ったことがある。} \end{array} \right.$

[22. a] [23. a] は単に過去の事実の叙述であるが、[22. b] [23. b] でわざわざ「～タコトガアル」としているのは、どうしてであろうか。この「コト」は、それぞれの実質内容が「事実」であるということを表しているわけで、いわば「～タコトガアル」が「過去の記録」とでもいったような意味合いを表現している。とすれば、「～タコトガアル」は、後でふれる「～ルコトガアル」との対比でも考えなくてはならないであろう。[22. b] の場合、「この町」が台風の通過する所に位置しているとすれば、

[22]' 大型台風がこの町を襲うことがある。

という「現在」を基点にした表現も考えられ、[22]' と [22. b] の関係は、「現在形」と「過去形」の対立とも考えられるからである。

ともかく [22. b] [23. b] を過去の「記録」と考えるとすると、主体が人間である場合でもこうした例は考えられる。

[24] コロンブスはアメリカへ行ったことがある。

[24] は、コロンブスの立場に立てば「経験」かもしれないが、「我々」には歴史的な「過去」の「記録」である、ということになる。ここまで考えてくると、「経験」とは「過去の記録」に他ならず、つまり「過去の記録」

の中に「経験」と呼べるものが含まれていると考えてもよさそうである。

ここで第三の問題になるが、「～タコトガール」が「過去の記録」だとすれば、当然その行為が過去として記録できる程度に過ぎ去ったものでなければならぬということになる。つまり、過ぎ去った行為は全て「過去」となり得るが、「経験」と呼べる過去、またそう呼ぶには近すぎる過去もあるということである。これは、具体的には「時」を示す副詞（句）の使用に関する問題である。簡単にみていこう。

[25] あの湖へは、昔、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 行った。} \\ \text{b} \text{ 行ったことがある。} \end{array} \right.$

[26] あの湖へは、最近、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 行った。} \\ \text{b} \text{ 行ったことがある。} \end{array} \right.$

「昔」「最近」とも a, b どちらの言い方でも成立しそうである。では、「時」をある一点に限定した場合はどうか。

[27] あの湖へは、三年前、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 行った。} \\ \text{b} \text{ 行ったことがある。} \end{array} \right.$

[28] あの湖へ、きのう、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 行った。} \\ \text{b} \text{ 行ったことがある。} \end{array} \right.$ ^(×)

「三年前」という過去は、「経験」の範囲に入るが「きのう」という近い過去は入らないと言えそうである。したがって、当然、「けさ」の出来事や「さっき」の出来事も「経験」の範囲内に入らないことになりそうである。「きのう」から段々に過去にさかのぼって行って、どこからが「経験」の範囲に繰り込まれるかは、ここでもまた主観的側面の強い問題であり、また先の実質的内容との関連もありそうである。

また、「時」の指定の仕方でも、はっきりと「一カ月前」というか、ばくぜんと「一、二か月ぐらい前に」というかで違って来るようである。

[29] あの湖へは、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ 一週間前に} \\ \text{b} \text{ 一、二週間ぐらい前に} \end{array} \right\}$ 行ったことがある。

[29] は、a, b ともに成立するであろうか。また、a, b を少しずつ過

去にさかのぼらせていった場合はどうであろうか。

今度は、「過去」でも「経験」でも言える場合を少し考えてみる。上では「時」の副詞(句)で考えたが、ここでは頻度の副詞(句)が関係してくる。頻度の副詞(句)も主観的側面の強い言い方である。

[30] ねえ、あの湖へ行った？

という質問に対しては、「過去」でも「経験」でも答えられる。その場合、頻度の副詞(句)の伴うこともある。

[31] ええ、行ったわ。

[32] ええ、行ったことがあるわ。

[31]' ええ、よく行ったわ。

[32]' ええ、何度も行ったことがあるわ。

[31] の答えは、単に自分の過去の動作に言及しての答えであるが、[32] では、あえて過去の動作を経験としてとらえて表現している、と言える。ただ、[31]' [32]' のように頻度の副詞(句)が伴う場合、両者の相違は表現内容上、それほど明瞭でなくなってくるようである。つまり [31]' は、「行く」という動作が「よく」行われたことを言っているが、話し手の気持としては「経験」を述べていることもあろう。

なお、「～タコトガアル」による「経験」の言い方は、[32]' のように回数や頻度を表す副詞(句)をつけていくと、なかにはすわりの悪いものがある。この点もよく検討してみると「経験」と「過去」の違いを考える材料になるであろう。

3.1.2. 習慣の言い方、回想の言い方

繰り返し行われた過去の動作は、「過去」や「経験」の他に「習慣」として表されることもある。この場合も副詞(句)の果たす役割は大きく、文意は文脈で決まってくる。

[31]'' ええ、 $\left. \begin{array}{l} \text{よく} \\ \text{何度も} \\ \text{毎日曜日} \end{array} \right\}$ 行ったわ。

過去の「習慣」について言おうとする場合、副詞（句）の問題の他に、述部に「～タ」、「～テイタ」のどちらを用いるかという問題もある。次の例も「習慣」の表現と言えよう。

[33] あの頃は、ラーメンばかり食べていたよ。

「～タ」「～テイタ」は、「～ル」「～テイル」の問題でもあるので、後でまた触れることにする。

[33] は、「～タモノダ」という言い方を用いて、

[33]' あの頃は、よくラーメンを食べたものだ。

と言えば、現在の立場から「あの頃」をかえりみでの「回想」の表現となる。以上のようなものが「経験」やそれに類する表現としてあるが、こうした表現の比較対照研究は興味ある課題であり、また日本語教育のために必要な基礎研究と言えよう。

「経験」を中心に「過去」、「習慣」、「回想」などに簡単に触れてきたが、このうち「現在」と表現上の関連を持つものは、「習慣」の言い方である。「現在」の「習慣」は、「過去」の「習慣」が「～タ」「～テイタ」で表されたのと同じように「～ル」と「～テイル」の両方の形で表される。

[34] 毎日、ラーメンを $\begin{cases} a & \text{食べます。} \\ b & \text{食べています。} \end{cases}$

これについては、2.2.で、⑪、⑬、⑭、⑯の例文を比べながら宮島達夫の「いくつかの文法的類義表現について」（『ことばの研究 第2集』、1964、国立国語研究所）を参考にして問題にした（p.14～15）。要点だけを簡単に繰り返すと、「～テイル」は行為そのものの様子を積極的に言うが、「～ル」にはその働きはなく、単なる叙述であること、またその行為を叙述する発言の基準が問題にならない場合にはどちらの形式も用いることができること、を指摘した。したがって、この映画の手紙のような場合には、強調したい行為には「～テイル」を用い、他では「～ル」を用いるというように文体上の配慮での使い分けができる。

3.1.3. 臨時的生起の言い方

「習慣」は、ある間隔をおいて定期的に行われる行為であるか、それかまれに、あるいは、時々起こる行為である場合には、

[35] あの湖へ $\left\{ \begin{array}{l} \text{たまに} \\ \text{時々} \end{array} \right\}$ 行くことが(も)あります。

のように「～ルコトガ(モ)アル」の形式で表される。2.1.では、これを一応、臨時的生起の言い方と呼んでみたが、この言い方と「習慣」では、どんな表現上の差があるかは、頻度の副詞の用い方とも関係がある。このことは、「～ルコトガアル」と「～タコトガアル」の表現内容上の相違を考えていく上でも問題になることである。

「～ルコトガ(モ)アル」の基本的な意味だけを考えると「～タコトガアル」と「現在」対「過去」の対立を示しているといえよう。

[36] あの湖へ $\left\{ \begin{array}{l} \text{a 行く} \\ \text{b 行った} \end{array} \right\}$ ことがある。

[37] 湖へ行くバスは、 $\left\{ \begin{array}{l} \text{a 遅れる} \\ \text{b 遅れた} \end{array} \right\}$ ことがある。

[36] は人間を主体にした例で、[37] は人間以外のものを主体にした例(映画中の㊸から)である。[37] は、[22]、[22]' で考えた例と同種のものである。[36] でも[37] でも基本的には、「コト」の有無を言い、その「コト」の生起が「現在」のことか「過去」のことかが関係している。つまり、現在、起こる(起こりえる)ことは、起きてしまえば過去となり、この違いがそれぞれに表現されている。ただ、それぞれの意味・用法に関しては、それ以上の考察が必要だし、また「経験」では「過去」の言い方との相違に目を向けたように、うまく簡単な名付けの出来ない「～ルコトガアル」も「現在」との相違を考えてみる必要があるであろう。

3.1.4. 予定の言い方

最後に「予定」に関する言い方だが、前にも触れたようにこれから先の行為を今の立場で述べるものを含めて広く考えるとすれば、「予定」の言い方はさまざまな表現がある。

- [38] これから行くよ。
- [39] 今、行くつもりだ。
- [40] すぐ行く予定だ。
- [41] 行くところだ。
- [42] 早く行きたい。
- [43] 行きたいと思う。
- [44] 行こうと思う。
- [45] 行くことにする。
- [46] 行くことにしている。
- [47] 行くつもりにしている。
- [48] 行くことになる。
- [49] 行くことになっている。

以上は、「予定」「意志」「希望」「決定」など、いろいろなものを含んでいる。他に「行きたがっている」とか「行くはずだ」「行くそうだ」のように他者に関して言う言い方もあり、また「らしい」「ようだ」「みたいだ」など、推量・推定の助動詞を用いて推し量ってという言い方も考えられる。

この映画で学習項目として取り上げたのは、「～スルコトニスル」と「～スルコトニナル」である。ここで簡単に整理しておくと「～スルコトニスル」は自分の予定や意志決定を表し、「～スルコトニナル」は、予定されている、すでにそう決まっているという内容を表す。

- [50] 来年、結婚することに $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ した。} \\ \text{b} \text{ なった。} \end{array} \right.$

[50. a] と [50. b] の表現上の差異は、「スル」と「ナル」の問題である。[50. a]の方が自分の立場から予定や意志決定を言うのに対し、[50. b]の方はそう予定されている、そう決まっていると状況に自分の立場を位置づけて言っている。「～スルコトニスル」が「～スルコトニシテイル」となると、すでにそう予定している、そう決めてそのつもりでいるという内容を表す。

⑮' 毎日、三時間、絵を書くことに $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ する。} \\ \text{b} \text{ している。} \end{array} \right.$

「～スルコトニシテイル」は、さらにすでに「習慣」として行っているという内容も表し得る。⑮' の b は、文脈しだいでそう解釈もできる。ここでも副詞（句）が大いに関係している。他の「習慣」を言う形式と関連づけて考えることも大事である。

「～スルコトニナル」、「～スルコトニナッテイル」の違いも「～テイル」の表現価値だけ違う。つまり、後者の方はそう決まっただけで、そう実現する見込みであるという既定の事柄を表す。

⑳' 十二時の列車で着くことに $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ なる。} \\ \text{b} \text{ なっている。} \end{array} \right.$

この「～スルコトニスル／シテイル」、「～スルコトニナル／ナッテイル」のうち、映画中に言語形式として表れているのは、「～コトニスル」と「～コトニナッテイル」だけである。学習段階の必要に応じて適宜学習項目を補ってほしい。「ナル」「スル」の問題については、映画解説書「うつくしいさらになりました」を参照してほしい。ここではそれに「コト」が組み合わされ、表現形式として複雑になり、また表現内容としては「予定」の観点から扱った。また、「～スルコトニスル」と「～スル」の表現内容の問題もあるが、2.2. で触れたので、ここで繰り返さない。

なお、ここでは「～スルコトニスル／ナル」の言い方で「コト」に前接する動詞は「～スル」であることを当然の前提として話を進めてきたが、「～シタコトニナル／スル」の形もある。これは表現内容としては「予定」と関係なく、「仮定」の言い方で扱った方がいいものである。

[51] あの湖へ行ったこと $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ にする。} \\ \text{b} \text{ になる。} \end{array} \right.$

[51] は、a, b とも実際に「行った」ことがないのに、[29. a] ではそう認めるという内容を表わし、[50. b] ではそういう結果になるという内容を表している。ただし、「～シタコトニナル」には、次のような用法もある。

[52] (あの山を越えてきたのだから,) 湖は, とうぜん, 通ってきたことになる。

さて, この映画は「予定」の表現とは言っても上に述べたような表現形式しか扱わなかったが, この日本語教育映画基礎篇では次のように学習項目として取り上げている。それぞれの項目については, それぞれの映画解説書にゆずることとする。

◎ 「～シタイ」「～シタガル」「～シタガッテイル」「～シヨウト思ウ」「～スルツモリダ」「～スルトコロダ」……「よみせをみにいきませんか」

◎ 「～スルソウダ」「～シソウダ」「～ヨウダ」(推定)「ラシイ」(推定)「～ハズダ」……「さくらがきれいだそうです」

3.2. 「コト」を含む類型的な表現

ここでは, 「コト」に関する全ての問題に渡って考えながら論を進めるといわけにはいかないが, 「コト」に関する問題の一応を提出して, その後, 「コト」が文の表現内容からみれば述部形成に関与し, 一種の固定した, 類型化した言い方になっているものに簡単に触れてみる。

「コト」は, いろいろと複雑な問題をはらんだ語である。「コト」の意味・用法全般を十分に論じようとするれば, それだけで一冊の「コト」論が出来上がることになろう。「コト」は, また「コト」を考えるだけで足りず, 「コト」との関連で考えたいものに「モノ」があり, さらに「ノ」について言及する必要がある場合もある。枠組を広くして, 同種の語をもっと広く取り扱おうとすれば, いわゆる形式名詞を問題にしなくてはならなくなる。

たとえば, 「～コトダ」を考える場合, 「～モノダ」「～ノダ」が視野に入ってくるし, さらに広げれば「～ワケダ」「～タメダ」「～ハズダ」などにも注意を向けていく必要がある。ここでは, ここで問題にする「コト」と関連する範囲で「モノ」についても多少言及するが, それ以上論は広げない。

3.2.1. 「コト」の意味・用法

まず、「コト」を語法上の観点から整理してみると、次のようなものを取り出せる。

- (1) 「コト」が修飾成分なしで用いられる場合
- (2) 「コト」に修飾句が付く場合
- (3) 「コト」に文相当の修飾成分が付く場合
- (4) 「コト」が文の表現内容からみれば述部形成に関与している場合
- (5) 「コト」が文末に付き、終助詞となっている場合

全ての「コト」がこの分類のどこかにきちんとおさまってしまうというわけではなく、いろいろと問題はあるが、代表的なものを例示していくと、(1)には「ことを起こす」とか「ことに当たる」のような慣用句的な言い方が数多くある。(2)には、

[53] この人形は面白いことができます。

[54] ある日のことです。

のような用例があげられる。修飾句なしには用いられない「コト」である。

(3)は、

[55] 彼があ湖へ行ったことは、本当だ。

のような例文での「コト」であるが、これについては、奥津敬一郎の『生成日本文法論』(1974, 大修館)や井上和子の「名詞句の構造」(『変形文法と日本語(上)』, 1976, 大修館)などに詳しい説明があるので参照されたい。

(4)の例には、この映画で学習項目とした「～スルコトガアル」「～シタコトガアル」「～コトニスル/ナル」などがあり、代表的な言い方として「～コトダ」をあげることができよう。(5)には、

[56] おや、ずいぶん上手に書けたこと。

[57] いっしょに行かないこと？

などの用例がある。

次に「コト」の意味の面を重視した分類に簡単に触れるが、これについては 森田良行(『基礎日本語・2』, 1980, 角川書店)から引用する。

- (1) 実質の意味を持った「コト」
- (2) 形式的意味しか持たない「コト」
- (2-1) いわゆる形式名詞としての用法
- (2-2) 文や句を体言化する「コト」

(1)は、修飾成分なしで用いられる「コト」に、(2-1)は修飾句の付く「コト」に、(2-2)は文相当の修飾成分が付く「コト」にほぼ相当すると考えられる。述部形成に関与する「コト」は、(2-2)の中に入れられている。この意味面を重視した分類も、語法上からみた分類と対応させながら、さらに細かな検討が必要であるが、それは今後の課題である。特に(2-2)の、文や句を体言化する「コト」では、文や句のそれぞれの実質、また違いをはっきりさせる必要がある。

3.2.2. 述部形成に関与する「コト」

以下のようなものが述部形成に関与する「コト」の例としてあげられる。

- [58] 遠くの川まで散歩することが(も)ある／多い／少ない。(「～スルコトガ(モ)アル／オオイ／スクナイ」=場合、可能性)
- [59] 列車が遅れることはないだろう。／あるまい。(「～スルコトハナイダロウ／アルマイ」=場合、可能性)
- [60] 急いで行くことはない。(「スルコトハナイ」=必要性)
- [61] あの湖へは行ったことがある。(「～シタコトガアル」=経験)
- [62] この町は大型台風が通過したことがある。(「～シタコトガアル」=過去の記録)
- [63] 英語の勉強をただけのことはある。(「～シタダケノコトハアル」=価値)
- [64] 彼は、泳ぐことができる。(「～スルコトガデキル」=可能)
- [65] あの湖は、泳ぐことができない。(「～スルコトガデキル」=可能)
- [66] あの湖は、泳ぐことがむずかしい／やさしい。(「～スルコトガムズカシイ／ヤサシイ」=難易)
- [67] 来週、東京へ行くことにする。(「～スルコトスル」=予定・決定)

- [68] 毎朝、散歩することになっている。(「～スルコトニシテイル」=習慣)
- [69] 酒類は一切飲まないことにしている。(「～スルコトニシテイル」=方針)
- [70] 来年、結婚することになる。(「～スルコトニナル」=予定・決定)
- [71] 道路は、右側を歩くことになっている。(「～スルコトニナッテイル」=一般的な決まり)
- [72] 先週、大阪へ行ったことにする。(「～シタコトニスル」=仮定)
- [73] 結局、東京まで出かけたことになる。(「～シタコトニナル」=仮定)
- [74] もっと読書をするのだ。(「～スルコトダ」=断定)
- [75] なんとも愉快なことだ。(「～スルコトダ」=感慨の表出)
- [76] よくラーメンを食べたことだ。(「～シタコトダ」=過去の習慣的行為に対する感慨の表出)
- [77] もっと勉強すること。(「～スルコト」=願望・命令)
- [78] あした、来るということだ。(「～スルトイウコトダ」=伝聞、うわさ)

『日本語の文法(下)』(寺村秀夫, 1971, 国立国語研究所)では、「～コトガアル」「～コトガデキル」などと「～コトダ」をわけて扱い、前者を「陳述度の低い名詞節(句)」とし、後者を「ムードの助動詞に準ずる用法」の中に含めている。「陳述度が低い」とは、「コト」で承ける動詞部分が「概念だけ」を表し、それに続く「ある」「できる」なども「なにものかについての叙述というほどの内容をもたない、その意味で形式的な、ものだということができるだろう」ということである。(p.143)

3.2.3. 「～コトダ」「～モノダ」「～ノダ」

「～コトダ」は、先にあげた語法上の分類でみていくと全ての段階があるものである。そして、実際はどの段階のものであるか決めがたいものがある。

- [79] それは、ことだ。
 [80] 実は、こういうことだ。
 [81] とにかく立派なことだ。
 [82] 早く君が行くことだ。

[79] は修飾成分なしの「コト」、[80]、[81] は修飾句の付く「コト」、[82] は文相当の修飾成分のある「コト」である。ただ、[82] は述部形成に關与する「コト」でもある。[79] のように実質の意味のある慣用的な言い方の「コトダ」を別にして、「～コトダ」の意味・内容を短かいことばで言い切ってしまうのは、なかなか難しい。[80] のように「コト」に「事」としての意味がまだある場合と、[81] のように「コト」が終助詞の用法の場合と似て気持の表現の一部分化している場合に大きく分けられようが（上記、森田良行論文での指摘）、[82] の例では断定であると同時に、それがよいことである、というニュアンスも含んでの表現であると考えられる場合もある。

- [83] 人の二倍も三倍も働くことだ。

上の例でも断定であると同時に、それが一番よいことだのニュアンスがある。

ここで「～コトダ」との対比で「～モノダ」に触れてみると、「～モノダ」の方にもこの二種の違いがあると言えそうである。

- [84] 毎日ちゃんと勉強するものだ。（「～スルモノダ」=当然、一般的事実）

- [85] よくラーメンばかり食べるものだ。（「～スルモノダ」=感慨の表出）

「～モノダ」は、他に「～シタモノダ」の用法があり、

- [86] あの湖へは、よく行ったものだ。（「～シタモノダ」=回想・述懐）
 があげられるが、

- [87] よく勉強するようになったものだ。（「～シタモノダ」=感慨の表出）
 といった用例もある。また、

[88] すぐ読んでみたいものだ。(「～シタイモノダ」=希望する気持の表出)

も「～モノダ」の用例である。この「～コトダ」「～モノダ」の意味・用法の違いを森田良行は「コト」「モノ」のもともとの意味の違いに関連づけて説明している(上記『基礎日本語・2』)。「コト」は、人と人や物の関係において生ずる出来事であり、「モノ」は人間の感覚で認知される外界にある存在である。したがって、「～コトダ」は「話し手自身の個別な意見、意向を提出」し、「～モノダ」は「一般論として示される」、というわけである。こうしたニュアンスの差を別にすれば、「～コトダ」「～モノダ」は入れ換えが出来ることも多い。

「～コトダ」「～モノダ」と並んで「～ノダ」にも簡単にふれる必要がある。「～ノダ」も、「～コトダ」が明確な断定、説明を表し、「～モノダ」が一般的な事実や当然のことを表すのが基本的な意味・用法であるのと共通して、説明・断定を言うものである。それが文脈の中では、強調を伴った断定であったり、理由や根拠を示したり、また決意・要求を表したりする。

[89] もうとっくに帰ったのだ。

[90] かぜをひいたので、早く帰るのだ。

[91] 早く帰るのだ。

なお、「～ノダ」については映画解説「もみじが とても きれいでした」で多少の解説を試みたので、そちらを参照してほしい。

3.2.4. 「モノガアル/ナイ」「モノナル(スル)」

最後に、「コト」についてはこの映画では「アル(ナイ)」、「ナル/スル」が下接する場合を取り上げたわけだが、「モノ」の場合はどうであるか考えてみたい。「モノガアル(ナイ)」の「モノ」が具体的事物の場合は、すでに映画解説「さいふは どこにありますか」、また「きりんは どこにいますか」で取り上げたところであるが、「～モノガアル」には自分の気持の表出の表現として「～モノダ」に近い用法もある。

[92] 私には、許せないものがある。

「モノニナル」には、期待していた通りうまくいく、という意味であって、一人前の人間になる、という意味を取り出すこともできる。

[93] あれこれ勉強したが、どれもものにならなかった。

[94] あれこれ回り道したが、やがて彼もものになった。

「モノニスル」は、「ナル」「スル」の関係で先の「モノニナル」をもとにして意味を押しはかることもできる。まず、習得する、自分のものにする、という意味が考えられ、したがって立派なものにしあげる、思いどおりのものにしあげる、という意味があげられる。

[95] 短期間のうちに、英語をものにした。

[96] さらに研究を続けて、将来、ものにしてみせる。

「コト」「モノ」は、複雑な意味・用法を持った語であるが、現代日本語を考える上で避けて通るわけにはいかない重要で基本的な語である。ここでは、予定していた「コト」「モノ」に関する論述を大はばに省略したが、さらに「コト」「モノ」の基本的な研究を進め、そこから日本語教育上必要な項目を選び出し、教育の中に組み込んでいく作業が必要である。

4. 練習問題

まずこの映画に出た動詞を中心にして、「～シタコトガアル」「～スルコトガ(モ)アル」「～スルコトニスル/シタ/シテイル」「～スルコトニナル/ナッタ/ナッテイル」の言い方を練習する。

A 次の a～h を使って、以下の練習をなさい。

- | | |
|----------------|----------------|
| a 絵をかく | b (日本の) ラジオをきく |
| c (日本の) テレビを見る | d (日本語の) 小説を読む |
| e (日本語の) 手紙を書く | f お城へ行く |
| g 町の図書館へ行く | h 神社まで散歩する |

A-1 例にならって言いなさい。

(例) (あそこの)湖へ行く → { (あそこの)湖へ行っただけが、あります。
(あそこの)湖へ {毎日} 行ったことが、あります。
{よく}

A-2 例にならって言いなさい。

(例) (あそこの)湖へ行く

→ { (あそこの)湖へ行くことが(も)あります。
(あそこの)湖へ {たまに} 行くことが(も)あります。
{ときどき}

A-3 例にならって言いなさい。

(例) (あそこの)湖へ行く

→ { (あそこの)湖へ行くことに {します。
{しています。
{しました。
あしたは、(あそこの)湖へ行くことに {します。
{しました。
午前中は、(あそこの)湖へ行くことにしています。

A-4 例にならって言いなさい。

(例) (あそこの)湖へ行く

→ (あそこの)湖へ行くことに {なります。
{なっています。
{なりました。

次に「～シタコトガアル」の練習をする。

B-1 例にならって言いなさい。

(例) この湖へ行ったことがありますか。(絵を見せながら)

→ { ええ (, あります)。
 ええ, この間, 行きました。
 ええ, 一度 { 行きました。
 行ったことがあります。
 ええ, 四年ほど前 { 行きました。
 行ったことがあります。
 いいえ (, ありません)。

- | | |
|---|------------------------|
| a | この湖の絵をかいたことがありますか。 |
| b | ラジオの深夜放送をきいたことがありますか。 |
| c | テレビのニュース解説を見たことがありますか。 |
| d | 明治時代の小説を読んだことがありますか。 |
| e | この町のお城へ行ったことがありますか。 |
| f | 町の図書館へ行ったことがありますか。 |

B-2 例にならって言いなさい。

(例) この湖, 行く → { I : ____さん, 前に, この湖へ行ったことがありますか。
 R : ええ。
 I : ああ, 行ったことがあるんですか。
 R : 四年ほど前, 一度行ったことがあります。
 I : ああ, そうですか。

- | | | | |
|---|----------------|---|--------------|
| a | この湖の絵, かく | b | ラジオの深夜放送, きく |
| c | テレビのニュース解説, 見る | d | 明治時代の小説, 読む |
| e | この町のお城, 行く | f | この町の図書館, 行く |

B-3 例にならって言いなさい。

(例) おいしい、すいか、食べる →

I : ああ、おいしい。
 R : おいしいでしょう。
 I : ええ。こんなおいしいすいか
 は、食べたことはありません。
 R : そうですか。

- | | | | |
|---|--------------|---|--------------|
| a | おいしい、おすし、食べる | b | おもしろい、小説、読む |
| c | 難しい、問題、見る | d | すばらしい、音楽、きく |
| e | きれいな、夕暮れ、見る | f | きれいな、湖(に)、来る |

次に「～スルコトガ(モ)アル」の練習をする。

C-1 例にならって言いなさい。

(例) よく、散歩を(も)しますか。 →

ええ(、)します。
 ええ、することがあります。
 ええ、たまに。
 いいえ(、)しません。
 いいえ、めったに(しません)。

- | | |
|---|---------------|
| a | 朝は、早く起きますか。 |
| b | 夜は、早く寝ますか。 |
| c | いつもパンを食べますか。 |
| d | 毎日、新聞を読みますか。 |
| e | よく、バスが遅れますか。 |
| f | たいてい、遅く帰りますか。 |

C-2 例にならって言いなさい。

(例) なかなかバスが来ませんね。(時々、遅れる)

→ええ、時々遅れることがあります。

- | | |
|---|----------------------------|
| a | なかなか車が来ませんね。(時々、道が込んでいます) |
| b | なかなかバスが来ませんね。(時々、道が込んでいます) |

- b なかなか上手ですね。(たまに, うまくできる)
- c なかなか難しいですね。(たまに, うまくできない)
- d 日本の小説ですね。(時々, 読む)
- e 日本の音楽ですね。(たまに, きく)

次に「～スルコトニスル/シタ/シテイル」の練習をする。

D-1 例にならって言いなさい。

(例) 午後は, どうしましょうか。(絵をかく)

→わたしは, 絵をかくことに {
 します。
 しています。
 しました。

- | | |
|------------|---------------|
| a 湖へ行く | b 散歩する |
| c ここにいる | d ラジオの音楽をきく |
| e 新聞の社説を読む | f テレビのニュースを見る |

D-2 例にならって言いなさい。

(例) 何か, ごちそうを作る, 何, てんぷらを作る

→ { I : 何か, ごちそうを作ることにしましょう。
 R : 何にしましょうか。
 I : そうですね。
 R : 何がいいでしょう/かしら。
 I : 任せます(わ)。
 R : じゃあ, てんぷらを作ることにします。
 I : それがいいですね。

- | |
|------------------------------|
| a 何か, テレビを見る, 何, ドラマを見る |
| b 何か, プレゼントをする, 何, 花をプレゼントする |
| c どこか, 遊びに行く, どこ, お城へ行く |
| d どこか, 散歩に行く, どこ, 近くの神社へ行く |

次に「～スルコトニナル」の練習をする。

E 例にならって言いなさい。

(例) 今日は、淳子さんの来る日ですね。(列車で着く)

→ええ、列車で着くことになりました(なっています)。

- | | |
|---|------------------------------|
| a | 今日は、淳子さんの来る日ですね。(バスで来る) |
| b | 今日は、山田さんが北海道へ行く日ですね。(飛行機で行く) |
| c | 今日は、淳子さんと出かける日ですね。(お城を見に行く) |
| d | あしたは、友だちと旅行へ行く日ですね。(九州へ行く) |
| e | 四月から日本へ行くんですね。(留学する) |
| f | 三月に帰国するんですね。(自分の国で就職する) |

その他の学習項目の練習をする。まず「～タリ、～タリスル」の練習をする。

F 例にならって言いなさい。

(例) お昼御飯の後は(本を読む、ラジオをきく)

→お昼御飯の後は本を読んだり、ラジオをきいたりします。

- | | |
|---|--------------------------|
| a | 午前中は(絵をかく、散歩をする) |
| b | 毎日(お寺のスケッチをする、湖のスケッチをする) |
| c | 夕御飯の後は(テレビを見る、新聞を読む) |
| d | 午後は(勉強する、絵をかく) |
| e | 夏休みは(海へ行く、山へ行く) |
| f | 冬休みは(田舎へ帰る、旅行する) |

次に「～テ」の練習をする。

G 例にならって言いなさい。

(例) 田舎へ帰ってくる、もう、一週間もたつ

→田舎へ帰ってきて、もう二週間もたちました。

- | | |
|---|-------------------|
| a | 日本へ来る、もう、一年もたつ |
| b | 東京へ来る、早いもので、十年になる |

- c 大阪に住む, もう, 三年もたつ
- d 大学生になる, 早いもので, 一年めが過ぎる
- e 結婚する, 早くも, 十年を迎える
- g 自分の国へ帰る, 早いもので, 半年たつ

次に動詞文による連体修飾の練習をする。

H 例にならっていいなさい。

- (例) 今日は, ……………日ですね。(淳子さんが来ます)
→今日は淳子さんの来る日ですね。

- a 今日は, ……………日ですね。(東京へ行きます)
- b あしたは, ……………日ですね。(試験があります)
- c 今日は, ……………日ですか。(田舎へ帰ります)
- d あしたは, ……………日ですか。(旅行に出かけます)
- e 来年は, ……………予定ですか。(日本へ行きます)
- f 今年は, ……………予定ですか。(日本にいます)

最後に総合練習をする。

I 次の語をテーマにして話をしなさい。カッコ内の語は使っても使わなくてもよい。

- a 田舎(民家, 湖, 駅, 東京, ……)
- b 散歩(川, 神社, お寺, お城, ……)
- c 見物(お城, 列車, バス, ……)
- d ごちそう(てんぷら, すいか, ……)
- e スケッチ(湖, 民家, お城, 油絵, ……)
- f 手紙(勉強, 散歩, 絵, ……)

J 次の指示にしたがって手紙を書きなさい。

- a 淳子の立場で, 東京の母へ手紙を書く。
- b 淳子の立場で, 東京へ戻ってから正子にお礼の手紙を書く。

- c 自分自身の立場で、夏休みの中ごろ先生に手紙を書く。
 - d 自分自身の立場で、夏休みの中ごろ友だちに手紙を書く。
-

5. 参考文献

- 安達 隆一 1977 「名詞句構造における『モノ』『コト』『ノ』——統語論的構造の差異を中心として——」『国語国文学報』31 愛知教育大学
- 井上 和子 1976 『変形文法と日本語(上)』大修館
- 奥津敬一郎 1974 『生成日本文法論』大修館
- 神川 正彦 1977 「〈こと〉と〈もの〉」『国学院雑誌』78—10
- 久野 暉 1973 『日本文法研究』大修館
- 佐治 圭三 1969 「『こと』と『の』——形式名詞と準体助詞——〈その一〉」『日本語・日本文化』1 大阪外国語大学留学生別科
- 1972 「『ことだ』と『のだ』——形式名詞と準体助詞——〈その二〉」『日本語・日本文化』3 大阪外国語大学留学生別科
- 鈴木 重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 田中 章夫 1965 「するわけだ, することだ」『国語文法講座3』明治書院
- 寺村 秀夫 1981 『日本語の文法(下)』(日本語教育指導参考書5) 国立国語研究所
- 富田 博文 1979 「日本語補文構造考——『こと』と『の』について——」『関東学院大学文学部紀要』29
- 友田英津子 1979 「『こと』と『の』の意味の違いについての覚え書き」『武蔵野女子大学紀要』14
- 日本語教育学会(編) 1982 『日本語教育事典』大修館
- 宮島 達夫 1964 「いくつかの文法的類義表現について」『ことばの研究 第2集』国立国語研究所
- 森田 良行 1980 「こと」『基礎日本語・2』角川書店
- 山口 登 1973 「日本語の『～ノ・コト』についての序説」『福島大学教育学部論集』25—2

手紙の書き方に関しては、以下のものを参考にするとよい。

国際交流基金 1974 『文章表現』（教師用日本語教育ハンドブック①）

日本語教育学会(編) 1982 『日本語教育事典』 大修館

文化庁 1978 「手紙の書き方」『言葉に関する問答集4』（「ことば」シリーズ9）

資料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭辞「お」や、接尾辞「さん」「ど(度)」は、見出し語として取り上げている。ただし「おかあさん」等は、そのまま見出し語に立っている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立っている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
 - 2.—4. 助詞「たり」は動詞部分から切り離し、見出し語にしている。
 - 2.—5. 形容動詞は、「___な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—6. 「です」に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—7. 「おかえりなさい」等慣用的表現として扱ったものや、「気をつける」等、熟語的表現として扱ったものは、そのまま見出し語にしている。
 - 2.—8. 接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしない。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 「さんぽ」等は、名詞である場合とサ変複合動詞である場合で下位分類した。
 - 3.—2. 「これ」は、その意味、用法によって下位分類してある。

- 3.—3. 「こと」は、前接、下接する成分の違いで下位分類してある。
- 3.—4. 数詞や助数詞の違いによって、助数詞や数詞の発音が異なる場合は、下位分類した。
- 3.—5. 動詞は、まず本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は、「ます」形であるか、「たり」、「——て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞等が違えばさらに下位分類してある。また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。補助動詞の意味・用法の違いによる下位分類はしていない。
- 3.—6. 「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「です」か「んです」であるかにより下位分類してある。
- 3.—7. 「はい」は応答語であるか、呼びかけ語であるかで下位分類してある。
- 3.—8. 助詞「か」「が」「に」「ね」「を」等は、その意味、用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ません」「ました」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。ただし「ましょう」は省略していない。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1) (2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には()で語の使用回数を示した。

あー(1)

㉙ あー、ほんと。

ああ(1)

㉚ ああ、そうですか。

あかい [赤い] (1)

㉛ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

あした(1)

㉜ じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

あたり(1)

㉝ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじあのあたりをさんぽします。

あっ(3)

㉞ あっ、もうバスのじかんだわ。

㉟ あっ。

㊱ あっ、それ。

あつい [暑い] (2)

(1)㊲ とうきょうは、まいにち、あついでしょね。

(2)㊳ あつかったでしょう。

あと [後] (1)

㊴ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

あぶらえ [油絵] (1)

㊵ じゃあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

ありがとう(2)

㊶ どうもありがとう。

㊷ ありがとう。

ある(13)

(1)㊸ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじあの

あたりをさんぽします。

- (2)⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。
- ⑭ ラジオのおんがくをきくこともあります。
- ⑮ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。
- ⑯ じゅんごさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。
- ⑰ いちど、きたことがあります。
- ⑱ このおしろのえをかいたことがありますか。
- ⑲ じゅんごさんは、このみずうみへいったことがありますか。
- ⑳ いいえ、ありません。
- ㉑ みずうみのえをかいたことがありますか。
- (3)⑳ おしろへいったことがあるんですか。
- ㉒ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。
- ㉓ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

いい(1)

- ㉔ うーん、なにがいいかしら……。

いいえ(3)

- ㉕⑲ いいえ。
- ㉖ いいえ、ありません。

いく [行く] (9)

- (1)⑲ さあ、いきましょう。
- (2)⑭ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかぎにいけます。
- ⑮ じゃあ、さんぽにいきませんか。
- (3)④ これからちょっと、かいものについてきます。
- (4)⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。
- ⑰ えきまでむかえにいくことにします。
- ⑱ じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。
- (5)⑳ おしろへいったことがあるんですか。

㉞ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

いってきます [行ってきます] (1)

㉟ ジャあ、いってきます。

いただきます(1)

㊫ いただきます。

いち [一] (2)

(1)㉡ いちど、きたことがあります。

(2)㉢ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもちました。

いつ(1)

㉤ いつですか。

いってらっしゃい(1)

㉦ いってらっしゃい。

いなか [田舎] (1)

㉧ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもちました。

いる(6)

(1)㉡ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

(2)㉢ ごぜんちゅうは、えのべんぎょうをしています。

㉣ ええ、じゅうじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

㉤ つかれていませんか。

㉦ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

(3)㉧ まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。

うーん(1)

㉨ うーん、なにがいいかしら……。

うち [家] (1)

㉩ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

え [絵] (9)

- ⑬ ごぜんちゅうは、えのべんぎょうをしています。
- ⑭ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。
- ⑮ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。
- ⑯ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。
- ⑰ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。
- ⑱ このおしろのえをかいたことがありますか。
- ⑲ ほかに、どんなえをかきました？
- ⑳ みずうみのえをかいたことがありますか。
- ㉑ わたしも、みずうみのえをかくことにします。

ええ (13)

- ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ええ。
- ㊿ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっていま
す。
- ㊿ ええ、とてもたのしいわ。
- ㊿ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。

えき [駅] (1)

- ㊿ えきまでむかえに行くことにします。

お (7)

- ㊿ じゅんこさん、おげんきですか。
- ⑯ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。
- ⑰ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。
- ⑲ おしろへいったことがあるんですか。
- ⑳ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。
- ㉑ このおしろのえをかいたことがありますか。
- ㉒ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずう
みをかいたりしています。

おいしい (3)

④⑥ まゑ、おいしい。

④⑦ おいしいでしょう。

④⑧ こんなおいしいすいかは、たべたことがありません。

おかあさん〔お母さん〕(1)

②⑧ おかあさんにまかせますわ。

おかえりなさい〔お帰りなさい〕(1)

③⑤ おかえりなさい。

おきる〔起きる〕(1)

①① わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじあのあたりをさんぽします。

おくれる〔遅れる〕(2)

(1)⑨⑨ バスにおくれます。

(2)⑥⑥ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。

おや(1)

⑤⑨ おや、さんじですね。

おらくに(1)

⑥⑩ ジャあ、おらくに。

おわり〔終わり〕(1)

⑨① もう、おわりにしませんか。

おんがく〔音楽〕(1)

①⑦ ラジオのおんがくをきくこともあります。

か(1⑤)

(1)⑦⑦ じゅんこさん、おげんきですか。

⑤① じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

⑤④ いつですか。

⑥① つかれていませんか。

⑥⑥ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。

⑥⑧ このおしろのえをかいたことがありますか。

- ⑦⑤ じゅんごさんは、このみずうみへいったことがありますか。
- ⑦⑧ みずうみのえをかいたことがありますか。
- (2)②⑤ なににしましょうか。
- ⑥③ じゃあ、さんぽにいきませんか。
- ⑥⑦ ごごは、どうしましょうか。
- ⑥⑨ もう、おわりにしませんか。
- (3)⑥⑩ そうですか。
- ⑥⑥ ああ、そうですか。
- ⑥⑦ おしろへいったことがあるんですか。

が(15)

- (1)①⑧ じゅんごさんがこちらへくるひは、らいげつのこののかでしたね。
- ②② きょうは、じゅんごさんがくるひですね。
- ②⑦ うーん、なにがいいかしら……。
- ②⑦ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。
- ②④ なかなか、バスがきませんね。
- ②⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。
- (2)④⑨ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。
- ⑤① じゅんごさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。
- ⑤③ いちど、きたことがあります。
- ⑤⑦ おしろへいったことがあるんですか。
- ⑤⑧ このおしろのえをかいたことがありますか。
- ⑤⑨ じゅんごさんは、このみずうみへいったことがありますか。
- ⑤⑩ みずうみのえをかいたことがありますか。
- ⑤⑥ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。
- ⑤⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

かいもの〔買物〕(1)

- ⑤ これから、ちょっと、かいものについてきます。

かえる〔帰る〕(1)

⑩ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

かく(10)

(1)⑦ ほかに、どんなえをかきました？

⑨ ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

(2)⑭ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

(3)⑮ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

⑳ わたしも、みずうみのえをかくことにします。

(4)⑯ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

㉑ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

(5)⑲ このおしろのえをかいたことがありますか。

⑦③ みずうみのえをかいたことがありますか。

かしら(1)

②⑦ うーん、なにがいいかしら……。

から(3)

(1)③ まさこさんからてがみですよ。

(2)⑤ これから、ちょっと、かいものについてきます。

⑧① ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

かわ [川] (2)

⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

きく [聞く] (1)

①⑦ ラジオのおんがくをきくこともあります。

きょう [今日] (2)

②② きょうは、じゅんこさんがくるひですね。

③⑥ きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。

きれいな(4)

⑦⑦ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

⑨④ きれいでしょね。

⑨⑤ まあ、きれい。

⑨⑦ きれいですね。

きをつける [気をつける] (1)

③② きをつけて。

くる [来る] (8)

(1)⑧④ なかなか、バスがきませんね。

(2)⑤⑤ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

(3)⑤⑤ これから、ちょっと、かいものについてきます。

(4)⑩⑩ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

(5)⑩⑩ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

②② きょうは、じゅんこさんがくるひですね。

(6)⑤① じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

⑤③ いちど、きたことがあります。

げんきな [元気な] (1)

⑦⑦ じゅんこさん、おげんきですか？

けんぶつ [見物] (1)

⑤⑤ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

ごご [午後] (1)

⑧⑦ ごごは、どうしましょうか。

このか [九日] (1)

⑩⑩ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

ごじゅうに [五十二] (1)

②③ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

こぜん〔午前〕(2)

⑬ こぜんちゅうは、えのべんきょうをしています。

⑰ こぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

ごちそう(1)

⑳ なにかごちそうをつくることにしましょう。

こちら(2)

㉑ こちらは、たいへんずしいです。

㉒ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

こと㉑

(1)⑬ ときどき、とおくのかまでいくこともあります。

⑰ ラジオのおんがくをきくこともあります。

⑳ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。

㉑ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

(2)⑭ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。

⑰ じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

⑲ いちど、きたことがあります。

⑳ おしろへいったことがあるんですか。

㉑ このおしろのえをかいたことがありますか。

㉒ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

㉓ みずうみのえをかいたことがありますか。

(3)⑮ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

⑲ えきまでむかえに行くことにします。

㉒ なにかごちそうをつくることにしましょう。

㉓ きょうは、てんぶらをつくることにしましたよ。

㉔ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。

㉕ わたしも、みずうみのえをかくことにします。

㉖ じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

㉞ てして、ゆづかたまでいるここにしましょつよ。

㉟ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

(4)㊸ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

この(3)

㊿ じゅんごさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

㊽ このおしろのえをかいたことがありますか。

㊾ じゅんごさんは、このみずうみへいったことがありますか。

このあいだ [この間] (1)

㊿ このあいだ、スケッチをしました。

これ(2)

(1)㊿ これから、ちょっと、かいものについてきます。

(2)㊿ これですね。

こんな(1)

㊿ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。

こんにちは(2)

㊿㊽ こんにちは。

さあ(2)

㊽ さあ、どうぞ。

㊿ さあ、いきましょう。

さん [三] (2)

㊿ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

㊿ おや、さんじですね。

さん(6)

㊿ まさごさんからてがみですよ。

㊿ じゅんごさん、おげんきですか。

㊿ じゅんごさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

㊿ きょうは、じゅんごさんがくるひですね。

- ⑤1 じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。
⑦⑤ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

さんぽ〔散歩〕(4)

- (1)⑥⑨ ジャあ、さんぽにいきませんか。
⑥⑥ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。
(2)①① わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぽします。
⑥④ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。

じ〔時〕(5)

- ①④ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかぎにいきます。
②⑨ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。
⑤⑨ おや、さんじですね。
⑧① ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。
⑧⑤ もう、はちじにじっふんですよ。

じかん〔時間〕(2)

- (1)②⑨ あっ、もうバスのじかんだわ。
(2)①⑤ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

じゃあ(5)

- ③⑨ ジャあ、いってきます。
⑥⑥ ジャあ、おらくに。
⑥⑥ ジャあ、さんぽにいきませんか。
⑧① ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。
⑨⑨ ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

しゅうかん〔週間〕(1)

- ①⑩ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

じゅうに〔十二〕(1)

- ㉓ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっていま
す。

じゅんこ〔淳子〕(6)

- ① じゅんこ。
- ⑦ じゅんこさん、おげんきですか。
- ⑱ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこののかでしたね。
- ㉒ きょうは、じゅんこさんがくるひですね。
- ⑤① じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。
- ⑦⑤ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

しろ〔城〕(4)

- ⑤⑤ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。
- ⑤⑦ おしろへいったことがあるんですか。
- ⑥④ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましようよ。
- ⑥⑧ このおしろのえをかいたことがありますか。

じんじゃ〔神社〕(1)

- ①① わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃの
あたりをさんぽします。

すいか(1)

- ④⑨ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。

スケッチ(4)

- (1)②⑨ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずう
みをかいたりしています。
- (2)⑦⑨ このあいだ、スケッチをしました。
- ⑦⑨ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずう
みをかいたりしています。
- ⑧⑨ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

すずしい〔涼しい〕(1)

(9) こちらは、たいへんすずしいです。

する(23)

(1)(70) このあいだ、スケッチをしました。

(87) ごごは、どうでしょうか。

(2)(11) わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

(3)(25) なににしましょうか。

(91) おわりにしませんか。

(4)(66) まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。

(72) ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

(5)(72) ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

(6)(16) おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

(7)(15) まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

(19) えきまでむかえに行くことにします。

(24) なにかごちそうをつくることにしましょう。

(36) きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。

(64) そうだ、おしろまでさんぼすることにしようよ。

(80) わたしも、みずうみのえをかくことにします。

(81) じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしよう。

(83) そして、ゆうがたまでいることにしようよ。

(89) わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

(8)(18) ごぜんちゅうは、えのべんきょうをしています。

(9)(66) まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。

(72) ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

(10)⑧9 わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

(11)⑥4 そうだ、おしろまでさんぼすることにしましょうよ。

そう(4)

(1)⑥0 そうですか。

⑤6 ああ、そうですか。

(2)②2⑧8 そうですね……。

そうだ(1)

⑥4 そうだ、おしろまでさんぼすることにしましょうよ。

そして(1)

⑧3 そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

それ(1)

④1 あっ、それ。

だ(1)

②9 あっ、もうバスのじかんだわ。

たいへん(1)

⑨ こちらは、たいへんすずしいです。

ただいま(1)

③4 ただいま。

たつ(1)

⑩ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

たのしい〔楽しい〕(1)

⑥7 ええ、とてもたのしいわ。

たべる〔食べる〕(1)

④9 こんなおいしいすいかは、たべたことがありません。

たり(だり)(7)

①6 おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

①6 おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

⑥6 まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。

⑥⑥ まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

ちかく〔近く〕(2)

①① わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

⑦② ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

ちゅう〔中〕(2)

①③ ごぜんちゅうは、えのべんきょうをしています。

⑦⑦ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

ちよっと(1)

⑤ これから、ちよっと、かいものについてきます。

つかれる〔疲れる〕(1)

⑥① つかれていませんか。

つく〔着く〕(1)

②③ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

つくる〔作る〕(2)

②④ なにかごちそうをつくることにしましょう。

③⑥ きょうは、てんぶらをつくることにしましたよ。

つづき〔続き〕(1)

⑨⑨ じゃあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

で(3)

- (14) はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいけます。
- (23) ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっていま
す。
- (81) ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことに
しましょう。

てがみ〔手紙〕(1)

- (8) まさこさんからてがみですよ。

でした(1)

- (18) じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

でしょう(4)

- (1)(8) とうきょうは、まいにち、あついでしょうね。
- (94) きれいでしょうね。
- (2)(43) あつかったでしょう。
- (47) おいしいでしょう。

です(18)

- (1)(9) こちらは、たいへんすずしいです。
- (2)(7) じゅんこさん、おげんきですか。
- (54) いつですか。
- (3)(60) そうですか。
- (56) ああ、そうですか。
- (4)(22) きょうは、じゅんこさんがくるひですね。
- (59) おや、さんじですね。
- (73) これですね。
- (97) きれいですね。
- (5)(26)(88) そうですね……。
- (6)(3) まさこさんからてがみですよ。
- (77) ごぜんちゅうとゆうがたがともきれいですよ。
- (85) もう、はちじにじっふんですよ。

(1797) おしつへいったことかめるんじやか。

⑥ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。

⑥ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。

⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

てつだう [手伝う] (1)

⑦ わたしも、てつだいます。

では(1)

⑩ では、また。

てら [寺] (1)

⑫ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

てんぷら(1)

⑬ きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。

と(1)

⑦ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

ど [度] (1)

⑬ いちど、きたことがあります。

どう(1)

⑦ ごごは、どうしましょか。

とうきょう [東京] (1)

⑧ とうきょうは、まいにち、あついでしょね。

どうぞ(1)

④ さあ、どうぞ。

どうも(1)

④ どうもありがとう。

とおく [遠く] (1)

⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

ときどき [時々] (2)

⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

⑯ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。

とても(2)

⑳ ええ、とてもたのしいわ。

㉑ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

どんな(1)

㉒ ほかに、どんなえをかきました？

なかなか(1)

㉓ なかなか、バスがきませんね。

なな [七] (2)

㉔ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

㉕ じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

なに [何] (2)

㉖ なににしましょうか。

㉗ うーん、なにがいいかしら……。

なにか [何か] (1)

㉘ なにかごちそうをつくることにしましょう。

なる(1)

㉙ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

に(2)

(1)⑩ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぽします。

(2)⑪ じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

⑫ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

(2)⑬ これから、ちょっと、かいものについてきます。

⑭ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

- ①⑨ えきまでむかえに行くことにします。
- ⑤⑤ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。
- ⑥③ じゃあ、さんぽにいきませんか。
- (3)②⑤ なににしましょうか。
- ⑨① おわりにしませんか。
- (4)②⑧ おかあさんにまかせますわ。
- (5)⑨⑨ バスにおくれます。
- (6)①⑤ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。
- ①⑨ えきまでむかえに行くことにします。
- ②④ なにかごちそうをつくることにしましょう。
- ③⑥ きょうは、てんぶらをつくることにしましたよ。
- ⑥④ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。
- ⑧⑩ わたしも、みずりみのえをかくことにします。
- ⑧① じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことに
 しましょう。
- ⑧③ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。
- ⑧⑨ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。
- (7)②③ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっていま
 す。

にじゅう [二十] (1)

- ⑧⑤ もう、はちじにじっぷんですよ。
- ね⑩
- (1)⑧ とうきょうは、まいにち、あついでしょうね。
- ①⑧ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。
- ②② きょうは、じゅんこさんがくるひですね。
- ⑤⑨ おや、さんじですね。
- ⑦③ これですね。
- ⑧④ なかなか、バスがきませんね。

94 きれいでしょうね。

97 きれいですね。

(2)98 そうですね……。

ねん [年] (1)

55 よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

の18

11 わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

11 わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

12 ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

13 ごぜんちゅうは、えのペンキょうをしています。

14 はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

16 おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

17 ラジオのおんがくをきくこともあります。

18 じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのここのかでしたね。

23 ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

29 あっ、もうバスのじかんだわ。

68 このおしろのえをかいたことがありますか。

72 ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

72 ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

78 みずうみのえをかいたことがありますか。

80 わたしも、みずうみのえをかくことにします。

81 じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

⑧9 わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

⑨0 ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

はい(16)

(1)⑧ どうきょうは、まいにち、あついでしょね。

⑨ こちらは、たいへんすずしいです。

⑪ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじあのあたりをさんぼします。

⑬ ごぜんちゅうは、えのべんきょうをしています。

⑮ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

⑯ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

⑰ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこののかでしたね。

⑲ きょうは、じゅんこさんがくるひですね。

⑳ きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。

㉑ こんなおいしいすいかは、たべたことはありません。

㉓ じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

㉕ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

㉗ ごごは、どうしましょか。

㉙ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

㉚ ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

(2)⑧9 ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

はい(2)

(1)⑥ はい。

(2)② はい。

バス(5)

⑭ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

⑲ あっ、もうバスのじかんだわ。

⑳ ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょ。

㉘ なかなか、バスがきませんね。

㉙ バスにおくれます。

はち [八] (3)

㉚ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

㉛ ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

㉜ もう、はちじにじっふんですよ。

はやい [早い] (1)

㉝ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぽします。

ひ [日] (2)

㉞ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこののかでしたね。

㉟ きょうは、じゅんこさんがくるひですね。

ひるごはん [昼ごはん] (1)

㊱ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

ふん [分] (4)

(1)㊲ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

㊳ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

㊴ ジャあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

(2)㊵ もう、はちじにじっふんですよ。

へ(6)

㊶ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

㊷ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

㊸ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこののかでしたね。

㊹ じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

㊺ おしろへいったことがあるんですか。

㉔ じゅんごさんは、このみすうみへいったことがありますか。

べんきょう [勉強] (1)

㉕ ごぜんちゅうは、えのべんきょうをしています。

ほかに(1)

㉖ ほかに、どんなえをかきました？

ほど(1)

㉗ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

ほん [本] (1)

㉘ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

ほんと(1)

㉙ あー、ほんと。

まあ(2)

㉚ まあ、おいしい。

㉛ まあ、きれい。

まいあさ [毎朝] (2)

㉜ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぽします。

㉝ じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじななふんのバスでいくことにしましょう。

まいにち [毎日] (3)

㉞ とうきょうは、まいにちあついでしょね。

㉟ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。

㊱ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。

まえ [前] (2)

㊲ じゅんごさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

㊳ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

まかせる(1)

㊴ おかあさんにまかせますわ。

まさこ〔正子〕(2)

③ まさこさんからてがみですよ。

②① まさこ

ました(6)

⑩, ⑮, ⑳, ㉕, ㉚, ㉞

ましょう(7)

㉔ なにかごちそうをつくることにしましょう。

㉕ なににしましょうか。

⑥④ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。

⑥① じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじなふんのバスでいくことに
しましょう。

⑥③ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

⑥⑦ ごごは、どうしましょうか。

⑥⑨ さあ、いきましょう。

ます(22)

⑤, ⑪, ⑫, ⑬, ⑭, ⑯, ⑰, ⑱, ㉓, ㉔, ⑳, ㉔, ㉞, ㉟, ㊱, ㊲, ㊳, ㊴,
㊵, ㊶, ㊷, ㊸, ㊹, ㊺, ㊻

ません(6)

④⑨, ⑥①, ⑥③, ⑦⑥, ⑧④, ⑨①

また(1)

②⑩ では、また。

まち〔町〕(1)

⑤① じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。

まで(4)

⑫ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

⑱ えきまでむかえに行くことにします。

⑥④ そうだ、おしろまでさんぽすることにしましょうよ。

⑥③ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

みえる〔見える〕(1)

③⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

みずうみ〔湖〕(6)

①④ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。

⑦⑫ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。

⑦⑫ じゅんこさんは、このみずうみへいったことがありますか。

⑦⑫ みずうみのえをかいたことがありますか。

⑧⑬ わたしも、みずうみのえをかくことにします。

③⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

みんな〔民家〕(1)

⑧⑬ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

むかえる〔迎える〕(1)

①⑥ えきまでむかえに行くことにします。

も(5)

①⑥ ときどき、とおくのかわまでいくこともあります。

①⑦ ラジオのおんがくをきくこともあります。

③⑧ わたしも、ていただきます。

⑧⑬ わたしも、みずうみのえをかくことにします。

(2)⑩ いなかへかえってきて、もういっしゅうかんもたちました。

もう(4)

⑩⑫ いなかへかえってきて、もう、いっしゅうかんもたちました。

②⑧ あっ、もうバスのじかんだわ。

⑧⑬ もう、はちじにじっぶんですよ。

⑧⑬ もう、おわりにしませんか。

ゆうがた〔夕方〕(2)

⑦⑫ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

③⑨ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

ゆうぐれ〔夕暮れ〕(1)

⑨⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

よ〔四〕(1)

⑤⑤ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。

よ(7)

③ まさこさんからてがみですよ。

③⑥ きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。

⑥④ そうだ、おしろまでさんぼすることにしましょうよ。

⑦⑦ ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。

⑧③ そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。

⑤⑤ もう、はちじにじっぶんですよ。

⑨⑨ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

よむ〔読む〕(1)

①⑥ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。

らいげつ〔来月〕(1)

①⑧ じゅんこさんがこちらへくるひは、らいげつのこのかでしたね。

ラジオ(1)

①⑦ ラジオのおんがくをきくこともあります。

れっしゃ〔列車〕(1)

②③ ええ、じゅうにじごじゅうにふんのれっしゃでつくことになっています。

わ(3)

②⑨ おかあさんにまかせますわ。

②⑨ あっ、もうバスのじかんだわ。

⑥⑦ ええ、とてもたのしいわ。

わたし〔私〕(5)

①① わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぼします。

- ㉟ わたしも、てつだいます。
- ㊱ わたしも、みずうみのえをかくことにします。
- ㊲ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。
- ㊳ ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。

を22

- (1)㊴ ごぜんちゅうは、えのべんぎょうをしています。
- ㊵ はちじななふんのバスで、みずうみへえをかきにいきます。
- ㊶ まいにち、さんじかんは、えをかくことにしました。
- ㊷ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。
- ㊸ おひるごはんのあとは、えをかいたり、ほんをよんだりします。
- ㊹ ラジオのおんがくをきくこともあります。
- ㊺ なにかごちそうをつくることにしましょう。
- ㊻ きょうは、てんぷらをつくることにしましたよ。
- ㊼ よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。
- ㊽ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。
- ㊾ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。
- ㊿ このおしろのえをかいたことがありますか。
- ㊰ このあいだ、スケッチをしました。
- ㊱ ほかに、どんなえをかきました？
- ㊲ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。
- ㊳ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。
- ㊴ ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。
- ㊵ みずうみのえをかいたことがありますか。
- ㊶ わたしも、みずうみのえをかくことにします。
- ㊷ わたしは、みんなのスケッチをすることにします。

- ⑨⑩ ジャあ、わたしはあぶらえのつづきをかきます。
- (2)⑪ わたしは、まいあさ、はやくおきて、うちのちかくにあるじんじゃのあたりをさんぽします。

ん(4)

- ⑫⑬ おしろへいったことがあるんですか。
- ⑭⑮ まいにち、さんぽをしたり、えをかいたりしているんですか。
- ⑯⑰ ええ、ときどき、おくれることがあるんです。
- ⑱⑳ ゆうぐれには、みずうみがあかくみえることがあるんですよ。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画

「みずうみのえを かいたことがありますか」

——経験・予定の表現——

企 画 国立国語研究所

制 作 日本シネセル株式会社

フィルム 16m/m EK カラー・スタンダード

巻 数 全1巻

上映時間 5分

現 像 所 東映化学

録 音 読売スタジオ

完 成 昭和54年9月13日

制作スタッフ

制 作 静 永 純 一 制作担当 佐 藤 吉 彦

脚 本 前 田 直 明 演 出 前 田 直 明

演出助手 野 田 章 撮 影 赤 松 龍 彦

撮影助手 白 岩 卓 照 明 大 友 敏 法

照明助手 工 藤 和 雄 音 楽 吉 田 征 雄

録 音 小 川 正 城 (読売スタジオ)

ネガ編集 齊 藤 康 一

配 役 淳 子 草 野 咲 子

正 子 土 井 美 加

淳子の母 姉 崎 公 美 (声)

正子の母 久 津 王 乃 灯

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」	
2	テーマ・タイトル 「みずうみのえを かい た こ とが あります か」 ——経験・予定の表現——	
3	<淳子の部屋> 淳子, 本を読んでいる 向こうで母の声がする 淳子, ふりかえる 母, ドアを開いて, 入って来 る 母, 去る 手紙の封を切る淳子	淳子の母「①じゅんこ。」 淳子の母「②はい。 ③まささんから てがみですよ。」 淳子「④どうもありがとう。 淳子の母「⑤これから, ちょ っとかいものにい ってきます。」 淳子「⑥はい。」
4	手紙を読みはじめる	
5	手紙 <ナレーション (正子)> 正子の帰省している所の画面 に変わる	「⑦じゅんこさん, おげ んきですか。 ⑧とうきょうは, まい にち, あついでしょう ね。
6	手紙を書く正子	⑨こちらは, たいへん すずしいです。 ⑩いなかへかえってき

- 7 神社を散歩する正子
8 正子
9 正子, 後姿
- 10 川辺を散歩する正子
- 11 バスに乗る正子
- 12 絵をかく正子
- 13 食事を終える正子
- 14 絵をかく正子
15 本を読む正子
16 ラジオを聞く正子
- 17 手紙を書く正子
- 18 手紙を書く正子
- 19 <正子の家——居間>
カレンダー(「八月九日」)
20 正子と母親

て、もう、いっしゅう
かんもたちました。

⑪わたしは、まいあさ、
はやくおきて、うちの
ちかくにあるじんじゃ
のあたりをさんぽしま
す。

⑫ときどき、とおくの
かわまでいくこともあ
ります。

⑬ごぜんちゅうは、え
のべんきょうをしてい
ます。

⑭はちじななふんのバ
スで、みずうみへえを
かきにいきます。

⑮まいにち、さんじか
んは、えをかくことに
しました。

⑯おひるごはんのあと
は、
えをかいたり、
ほんをよんだりします。

⑰ラジオのおんがくを
きくこともあります。

⑱じゅんこさんがこち
らへくるひは、らいげ
つのこのかでしたね。

⑲えきまでむかえにい
くことにします。

⑳では、また。

㉑まさこ」

	二人、食卓に座って話をしている	正子の母「②きょうは、じゅん こさんがくるひです ね。」
21	母親	正子「③ええ、じゅうにじご じゅうにふんのれっし ゃでつくことになって います。」
22	正子	正子の母「④なにかごちそう をつくることにし ましょう。 ⑤なににしませ うか。」
23	時計を見る正子 壁掛時計(「八時」を指してい る。)	正子「⑥そうですね……。 ⑦うーん、なにがいい かしら……。 ⑧おかあさんにまかせ ますわ。」
24	出かける正子 正子、立ちあがって出ていく	正子「⑨あっ、もうバスのじ かんだわ。 ⑩じゃあ、行ってきま す。」
25	<湖> 絵をかく正子	正子の母「⑪行ってらっし ゃい。 ⑫きをつけて。」
26	<正子の家——台所——> 料理をしている母親 正子、入って来る	正子「⑬ええ。」 正子の母「⑭おかえりなさい。 ⑮きょうはてんぷ

		らをつくることに しましたよ。」
		正子「 ³⁷ わたしも、てつだいます。」
27	二人、料理をしている 〈駅、ホーム〉 列車から降りてくる淳子（絵の道具が入った布袋を持っている）	
28	待っている正子 正子、淳子を見つけ、手をあげる	正子「 ³⁸ あっ。」 正子「 ³⁹ こんにちは。」 淳子「 ⁴⁰ こんにちは。」 正子「 ⁴¹ あっ、それ。」 淳子「 ⁴² ありがとう。」
29	正子、淳子の荷物を受け取る 出札口へ向かう淳子 〈正子の家——客間——〉 正子と淳子 正子の母親、お盆のすいかをテーブルにのせる	正子の母「 ⁴³ 暑かったですよ う。 ⁴⁴ さあ、どうぞ。」
30	淳子、正子、一口食べる 正子・淳子	淳子「 ⁴⁵ いただきます。」 淳子「 ⁴⁶ まあ、おいしい。」 正子「 ⁴⁷ おいしいでしょう。」 淳子「 ⁴⁸ ええ。 ⁴⁹ こんなおいしいすいかは、たべたことがありません。」
31	母親と淳子（母親、笑いながら）	正子の母「 ⁵⁰ そうですね。 ⁵¹ じゅんこさんは、まえに、このまちへきたことがありますか。」
32	淳子	淳子「 ⁵² ええ。 ⁵³ いちど、きたことがあります。」

33	回想写真 城を見物している淳子 城 正子	正子の母「⑤④いつですか。」 淳子「⑤⑤よねんほどまえ、おしろをけんぶつにきました。 正子の母「⑤⑥ああ、そうですか。 ⑤⑦おしろへいったことがあるんですか。」
34	淳子と母親	淳子「⑤⑧ええ。」
35	壁掛時計	
36	三時をつげる時計 淳子と母親	正子の母「⑤⑨おや、さんじですね。」 ⑥⑩じゃあ、おらくに。」
	母, 去る	
37	正子, 淳子	正子「⑥⑪つかれていませんか。」 淳子「⑥⑫いいえ。」 正子「⑥⑬じゃあ、さんばにいきませんか。」 淳子「⑥⑭そうだ、おしろまでさんぼすることにしましょうよ。」 正子「⑥⑮ええ。」
38	<城へ向かう散歩道> 散歩する二人	淳子「⑥⑯まいにち、さんぼをしたり、えをかいたりしているんですか。」 正子「⑥⑰ええ、とてもたのしいわ。」
39	城(情景) 城が見える所に、二人来る	

- | | | |
|----|----------------------------|---|
| 40 | 城へ入ってゆく二人 | 淳子「⑥このおしろのえをかいたことがありますか。」 |
| | | 正子「⑥ええ。
⑦このあいだ、スケッチをしました。」 |
| 41 | 〈正子の部屋〉
スケッチブック（城のスケッチ） | |
| 42 | 淳子、正子 | 淳子「⑦ほかに、どんなえをかきました？」 |
| 43 | 寺・川のスケッチ | 正子「⑧ちかくのおてらのスケッチをしたり、かわをスケッチしたり、みずうみをかいたりしています。」 |
| 44 | 正子と淳子 | |
| 45 | キャンパス | 淳子「⑨これですね。」 |
| 46 | 正子 | 正子「⑩ええ。
⑪じゅんごさんは、このみずうみへいったことがありますか。」 |
| 47 | 淳子 | 淳子「⑫いいえ、ありません。」 |
| 48 | 正子 | 正子「⑬ごぜんちゅうとゆうがたがとてもきれいですよ。——
⑭みずうみのえをかいたことがありますか。」 |
| 49 | 淳子 | 淳子「⑮いいえ。
⑯わたしも、みずうみのえをかくことにします。」 |
| 50 | 正子 | 正子「⑰じゃあ、あしたから、まいあさ、はちじ |

		<p>ななふんのバスでいくことにしましょう。」</p> <p>淳子「⑧ええ。</p> <p>⑨そして、ゆうがたまでいることにしましょうよ。」</p>
51	<バス停> バス時刻	
52	バスを待つ二人	<p>淳子「④なかなか、バスがきませんね。</p> <p>⑤もう、はちじにじっぷんですよ。」</p>
53	正子	<p>正子「⑥ええ、ときどき、おくれることがあるんです。」</p>
54	通り	
55	バスを待つ二人	
56	バスが来る	
57	<絵をかく二人と風景> 二人	
58	<食事をする二人> 淳子と正子	<p>正子「⑦ごごは、どうしましょうか。」</p> <p>淳子「⑧そうですね……。</p> <p>⑨わたしは、みんなのスケッチをすることにします。」</p> <p>正子「⑩じゃあ、わたしは、あぶらえのつづきをかきます。」</p>
59	<絵をかく二人> 淳子、正子	
60	正子 正子、絵をかいている	

61	淳子 淳子, スケッチをしている	
62	民家 (情景)	
63	<湖畔——夕方> 絵をかく淳子, 正子 正子, 淳子のところへやって来る	正子「①もう, おわりにしませんか。」 淳子「②ええ。」 正子「③ゆうぐれには, みずうみがあかくみえることがあるんですよ。」 淳子「④きれいでしょね。」
64	湖面 湖面はまだ染まらない	
65	正子 正子, 帰るしたくを始める	
66	淳子と正子 帰る二人 淳子, ふりかえって, 湖を見る	
67	淳子	淳子「⑤まあ, きれい。」
68	夕日に赤い湖面 (湖は赤く映えている)	正子「⑥あー, ほんと。 ⑦きれいですね。」
69	見る二人 淳子と正子, 去る	正子「⑧さあ, いきましよう。 ⑨バスにおくれます。」 淳子「⑩ええ。」
70	二人, 去って行く 企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社	

日本語教育映画解説16

みずうみのえを

かいたことが ありますか

——経験・予定の表現——

昭和58年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 東京(900)3111(代表)